

特別史跡三内丸山遺跡
年報

— 18 —

平成26年度

青森県教育委員会

序

特別史跡三内丸山遺跡は、縄文時代における集落の全体像や生活、自然環境等とその変遷を具体的に解明することができる、日本を代表する縄文遺跡と評価され、平成12年11月に特別史跡に指定されました。また、平成15年5月には、三内丸山遺跡の出土品1,958点が重要文化財に指定されています。

青森県は、三内丸山遺跡を貴重な歴史的遺産として保存するとともに、平成6年度から遺跡の整備と一般公開を行い、多くの方々に三内丸山遺跡を見学していただきました。

平成25年度は、第37次発掘調査を行い、北の谷の発掘調査報告書を刊行しました。また、最新情報展、企画展、縄文教室、季節ごとの縄文まつり、三内丸山遺跡報告会などを開催したほか、三内丸山遺跡魅力アップ推進事業としてさんまるムラづくり体験やホームページのリニューアル、遺跡内看板の外国語表記など、三内丸山遺跡を中心とした縄文文化の魅力と重要性を国内外に広く発信してまいりました。

この年報は、平成25年度の三内丸山遺跡の整備・調査研究・活用事業の概要についてまとめたものです。本書が三内丸山遺跡の理解や埋蔵文化財の保護と研究に寄与できれば幸いです。

刊行にあたり、三内丸山遺跡の保護・活用に御支援、御指導を賜りました皆様に対し深く感謝申し上げますとともに、今後ともより一層の御尽力をお願い申し上げます。

平成27年2月

青森県教育委員会

教育長 中村 充



発掘調査現地説明会



縄文の家づくり体験 軸組組み立ての様子
(右上は完成セレモニーの様子)

目 次

I 平成25年度の事業について

① 整備状況

(1) 平成25年度の整備の内容	1
------------------	---

② 調査研究

(1) 三内丸山遺跡調査	1
(2) 関連遺跡調査	3
(3) 遺跡環境調査	4
(4) 三内丸山遺跡発掘調査委員会	4
(5) 特別研究推進事業	5

③ 普及啓発

(1) シンポジウム等	8
(2) 企画展及び最新情報展	9
(3) 三内丸山縄文教室	9
(4) 三内丸山遺跡魅力アップ推進事業	12
(5) 印刷物の発行	16
(6) 資料貸出	17
(7) 講演会等	18
(8) 縄文まつり	19

II 平成25年度の見学者動向について 20

III 研究ノート

① 「三内丸山遺跡出土の異形石器の再検討」

岩田 安之（青森県教育庁文化財保護課）	23
---------------------	----

② 「三内丸山遺跡南盛土の剥片・碎片集中地点の石器について」

齋藤 岳（青森県埋蔵文化財調査センター）	33
----------------------	----

IV 特別研究推進事業成果概要報告

① 個人研究 「北東北における円筒土器文化の変容過程に関する考古学的研究」

永瀬 史人（青森県埋蔵文化財調査センター）	41
-----------------------	----

② 個人研究 「縄文土器の紐積み方法の復元とそれらの技術を選択した理由の解明」

小林 正史（北陸学院大学）	
鐘ヶ江 賢二（鹿児島国際大学）	57

V 日誌抄録 96

I 平成25年度の事業について

①整備状況

(1) 平成25年度の整備の内容

公開遺構の整備

平成7年度以降の遺跡の公開に伴い、劣化が進んだ箇所については修復・補充等の保存処理を継続的に行っている。平成25年度は大型掘立柱建物跡および南盛土について実施した。作業内容につ

いては以下の通りである。

○大型掘立柱建物跡…経年劣化により、柱穴部分に貼り付けてある擬土に剥落が生じていたため、そこを充填し、修復した。

○南盛土…遺構面の剥落が見られたため、当該箇所には黒色系遺構土を充填し、防カビ・防藻処理を実施した。

②調査研究

(1) 三内丸山遺跡調査

遺跡の全体像や集落構造の変遷の解明や、保存・活用、整備計画の策定・推進のための資料収集を目的とした学術調査を継続して行っている。

○第37次発掘調査

平成25年度は、遺跡西部に位置する西盛土の西側の調査と、遺跡北端部の予備調査を行った。西盛土の西側では、遺構分布範囲や新旧関係、詳細な時期を調査した。

- ・調査期間：平成25年5月28日～10月18日
- ・調査面積：745㎡
- ・主な出土遺物：土器、石器、土・石製品等46箱
- ・調査成果

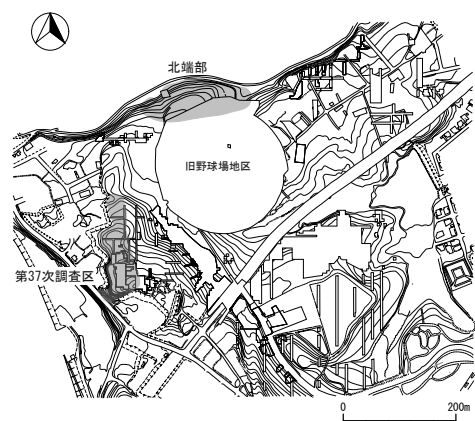
①遺構の分布について

平成25年度に調査を実施した箇所では、以前の調査（第18・21・24次調査）において、道路跡・土坑墓・掘立柱建物跡・土坑・盛土等が確認されていた。平成25年度には新たに環状配石墓1基、土坑墓3基、柱穴5基、土坑4基を確認した。

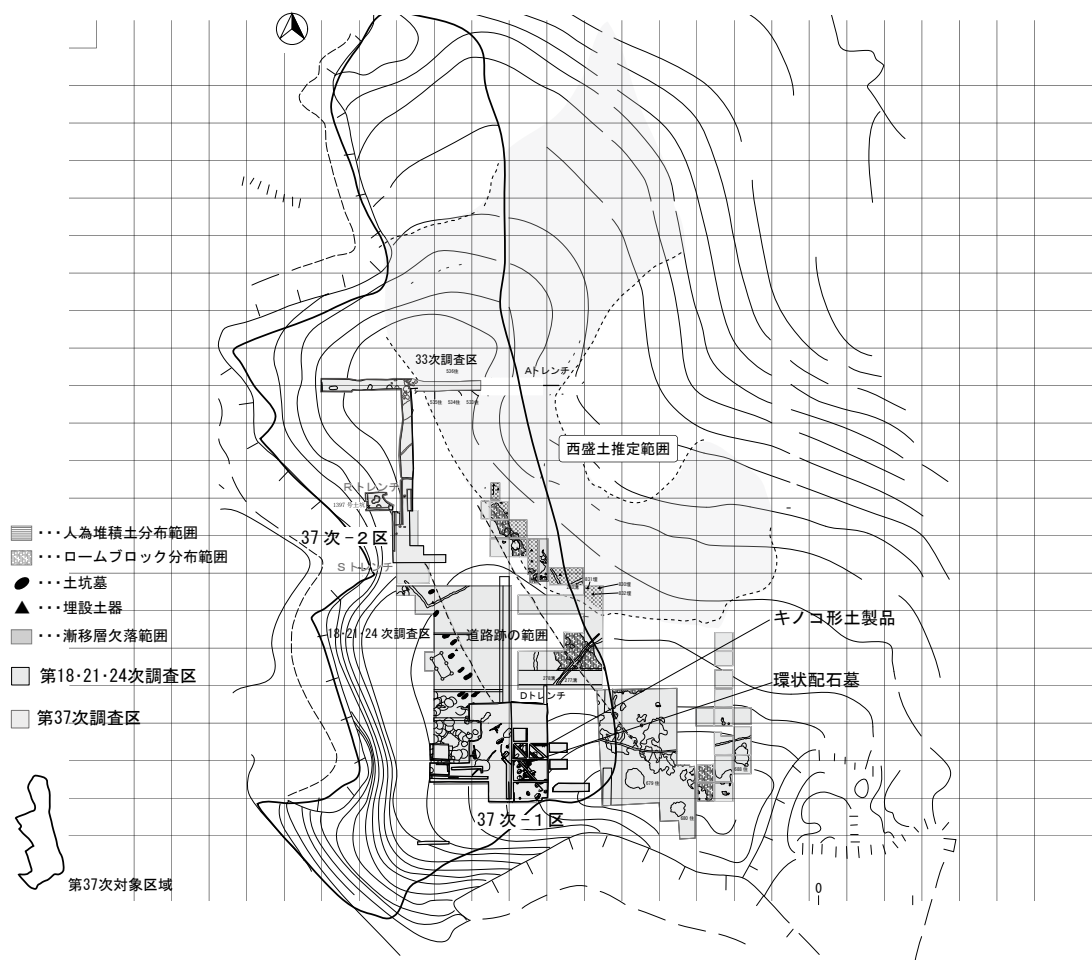
道路跡はこれまでの範囲より南東側への延長が

確認されたが、さらに南側の部分は後世の掘削により、不明である。環状配石墓も、これまでの調査成果を踏まえ、複数存在の可能性を考え周辺を精査したが、1基のみの確認にとどまった。調査区西側の土坑が密集する部分では、盛土層上面で遺構は確認されず、盛土層掘削後に遺構の平面形を確認した。精査の結果、フラスコ状土坑であることが判明した。

また、平成24年度の予備調査で竪穴建物跡の可能性があるとされた部分を精査したが、明確な掘り込みや床面のような硬化面は確認できなかった。



第37次調査区の位置



第37次調査区周辺の遺構分布図

②遺構の時期と新旧関係について

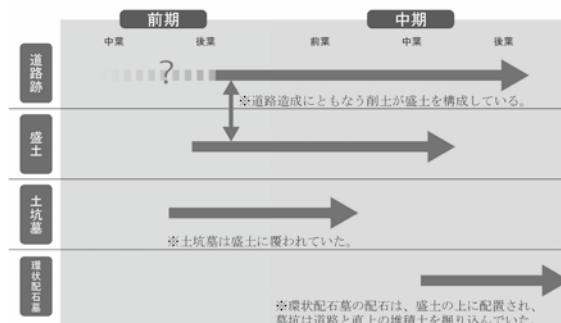
37次-1区に分布する盛土は、平成12～14年度の調査の際に、「中期中葉の包含層を最上層とする」という所見が与えられている。37次調査において掘り下げを行ったところ、前期末葉～中期中葉の遺物が確認された。盛土は、斜面頂部付近では下から黒褐色土層・暗褐色土層・黄褐色土層の順に堆積していた。下位の黒褐色土層には、前期末葉～中期中葉の遺物が主体的で、上位の黄褐色土層には中期中葉の遺物が含まれているため、盛土の形成は前期末葉～中期中葉であると考えられる。道路の造成が盛土形成の一つの契機となった可能性もあるが、周辺におけるそれ以外の造成にともなう可能性も考慮する必要があるため、今後盛土の堆積土のあり方や、遺物の出土状況等を精査し、さらに検討を加える必要がある。

土坑墓と柱穴・土坑・フラスコ状土坑は、前期

末葉～中期前葉の遺物を含む黒褐色土層に覆われていたため、ほぼ同時期かそれ以前に構築されたものと考えられる。また、斜面頂部付近では、柱穴が複数確認されたが、掘立柱建物等を構成するかについては、検討中である。

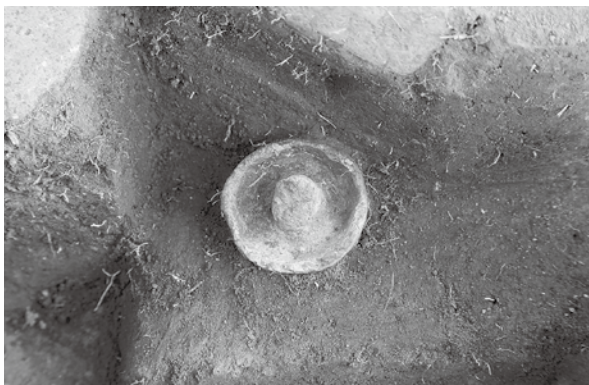
環状配石墓の配石は盛土の最上面に配置されていることから、中期中葉以降に構築されたと考えられる。周辺からは、中期後葉～末葉の土器やキノコ形土製品が出土している。

■ 1区の遺構の時期関係





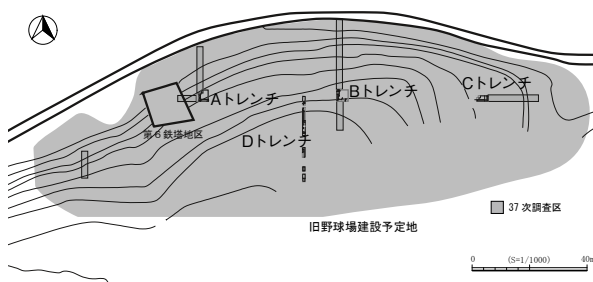
環状配石墓（北から）



キノコ形土製品出土状況

③遺跡北端部の予備調査

今年度も、遺跡北端部の予備調査を行った。平成24年度の調査では、すべてのトレンチで、二次堆積のローム質土が確認されたため、平成25年度はその範囲を確認するため、トレンチを拡張して調査を行った。その結果、Aトレンチで確認された二次堆積ローム質土は第6鉄塔地区に近づくにしたがい、厚くなって堆積していくことを確認した。Bトレンチでは南側で二次堆積のローム質土が確認できない部分があったため、周辺で広がりが見られなくなるものと考えられる。



北端部トレンチ配置図

（2）関連遺跡調査

県内外の発掘調査事例や遺跡の整備・活用事例を調査し、それらの情報を得ることにより、三内丸山遺跡の学術的解明を進めていくとともに、遺跡間のネットワーク形成に向けた交流を目指すものである。

平成25年度は、今後発掘調査を予定している低湿地部分の調査事例や有機質遺物の保管方法などについて調査するため、福井県に所在する鳥浜貝塚や、出土遺物の収蔵施設を視察した。

①福井県立若狭歴史民俗資料館

福井県小浜市に所在する県立博物館である。鳥浜貝塚から出土した有機質遺物等の重要文化財が収蔵・管理されている。訪問時は、改装のため閉館中であったが、鳥浜貝塚の調査日誌や調査時の図面等を閲覧し、有機質遺物の収蔵・管理状況を見学した。



木製品収蔵状況

②若狭町立三方縄文博物館 DOKIDOKI館

福井県若狭町に所在する町立博物館である。鳥浜貝塚や、三方湖周辺の遺跡から出土した遺物が収蔵・展示されている。担当者から展示品等についての説明を受けた後、収蔵施設を見学した。平成18年度に若狭町が調査を行った、ユリ遺跡から出土した丸木舟の出土状況を、土層転写の技術を応用した方法で展示している様子等を見学した。

③鳥浜貝塚

福井県若狭町に所在する縄文時代草創期～前期の遺跡である。1962・63・72・75・80～85年にかけて調査が行われ、木製品や骨角器等の有機質遺物が多量に出土した。また、当時国内最古の丸木舟が出土し、注目を浴びた遺跡である。調査は「生業活動の復元」というテーマの下で実施され、土壌サンプルのほか、製品以外の自然木も全て取り上げている。低湿地遺跡の調査方法として大変参考になる事例である。

現況は、宅地と河川流路であるが、遺跡が残存している可能性は極めて高い、とのことであった。



鳥浜貝塚現況

(3) 遺跡環境調査

遺跡の長期的保護に向けて、その具体的な対応を検討するための基礎的な資料を得るため、覆屋の室温・湿度等について定期的にデータ収集を行った。

(4) 三内丸山遺跡発掘調査委員会

三内丸山遺跡に関する学術的な解明や継続的な発掘調査計画検討のため、専門家による委員会を平成9年度から設置している。委員の任期は2年であり、年3回会議を開催している。

・委員長

岡村 道雄（奈良文化財研究所名誉研究員）

・副委員長

西本 豊弘（國學院大学大学院非常勤講師）

・委員

鈴木 三男（東北大学名誉教授）

辻 誠一郎（東京大学大学院教授）

小林 克（秋田県埋蔵文化財センター調査班班長、兼主任文化財専門員）

玉田 芳英（奈良文化財研究所都城発掘調査部副部長）

○第1回発掘調査委員会（平成25年7月5日）

開催場所：縄文時遊館会議室（以下同じ）

検討内容：平成25年度の発掘調査について

発掘調査の現地指導

総括報告書について

○第2回（平成25年9月10日）

検討内容：平成25年度の発掘調査について

発掘調査の現地指導

特別研究推進事業について

総括報告書について

○第3回（平成26年3月12日）

検討内容：平成25年度の発掘調査成果について

平成26年度の発掘調査について

特別研究推進事業について



発掘調査委員会の様子



委員による現地指導

(5) 特別研究推進事業

遺跡の全体像解明と縄文文化の解明を進めるため、平成10年度から行っている。平成25年度は、総合的・学際的研究を展開し、より一層遺跡の全体像の解明と縄文文化に関する研究を進めるため、関連する研究を公募し、研究を委託した。

個人研究は、「円筒土器文化」または「三内丸山遺跡」に関連する、遺跡、遺構・遺物などを対象とした、個人による研究である。

共同研究として平成24・25・26年度には円筒土器文化総合研究データベース作成を行い、三内丸山遺跡の全体像解明につながる研究を行う。

① 個人研究

「北東北における円筒土器文化の変容過程に関する考古学的研究」

永瀬 史人（青森県埋蔵文化財調査センター）

「縄文土器の紐積み方法と素地選択の復元、および、それらの技術を選択した理由の解明」

小林 正史（北陸学院大学）・鐘ヶ江 賢二（鹿児島国際大学）

② 円筒土器文化総合研究

三内丸山遺跡では、平成4年の発掘調査開始以来、縄文文化研究を先導し、幾多の重要な成果をあげてきた。円筒土器出土遺跡は年々増加しており、改めて現状を把握する必要性が生じている。

そこで、三内丸山遺跡保存活用推進室（以下、推進室）では、円筒土器文化研究の第一線で活躍する4道県の研究者からなるプロジェクトチームとNPO法人「三内丸山縄文発信の会」の協力を得て、平成24年度より円筒土器文化総合研究データベース（以下、データベース）を作成することとし、平成25年度はその二カ年目であった。

平成25年度は、平成24年度に概ね抽出された円筒土器出土遺跡リスト上の各遺跡の時期・遺構データの抽出を行い、データベース入力を行った。

プロジェクトチームによるデータベース作成検討会議を定期的に開催することで、データベース作成のデータ項目や作成方法、各段階での成果についての意見交換を行った。

平成25年度は下記のメンバーと日程で三回の検討会議を開催した。

プロジェクトチーム構成員

岡田 康博

（青森県教育庁文化財保護課）

全体作業統括者

青森県 小笠原 雅行

（青森県教育庁文化財保護課埋蔵文化財グループ）

齋藤 岳

（青森県埋蔵文化財調査センター）

永瀬 史人

（青森県埋蔵文化財調査センター）

秋田県 小林 克

（秋田県埋蔵文化財センター）

嶋影 壮憲

（大館市教育委員会 郷土博物館文化財保護係）

岩手県 星 雅之

(公益財団法人 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター)

北海道 藤原 秀樹

(北海道教育庁生涯学習推進局 文化
財・博物館課文化財調査グループ)

福田 裕二

(函館市教育委員会生涯学習部文化財課)

三内丸山遺跡保存活用推進室専門職員



第3回検討委員会の様子

○第1回検討会議

日時：平成25年7月15日（月）

会場：縄文時遊館

内容：平成24年度の円筒土器文化総合研究の進捗状況と平成25年度のデータベース作成作業予定について、事務局が報告を行い、メンバーより意見を得た。

また永瀬史人氏が「円筒土器文化研究におけるデータベースの作成と活用について」、齋藤岳氏が「円筒下層式成立前後の石器様相について」と題して発表を行った。

○第2回検討会議

日時：平成26年1月19日（日）

会場：縄文時遊館

内容：データベース作成の進捗状況と作業における課題、今後の予定について報告した。

また各時期ごとの円筒土器出土遺跡の分布図を作成し、円筒土器文化圏の推移と各県の様相の共通理解を図った。

○第3回検討会議

日時：平成26年3月2日（日）

会場：縄文時遊館

内容：円筒土器集落データベースの活用例として、円筒土器文化期における「青森市域と八戸市域の遺跡動態」の分析事例を報告し、意見を得た。

また貯蔵穴の分布から考える集落遺跡の様相と特質について、小林克氏が発表を行った。

平成25年度の作業

① 各種遺構のデータ抽出・入力

円筒土器出土遺跡の竪穴建物跡を中心とした遺構データを抽出し、各遺跡の性格・存続期間の把握を目指した。

発掘調査事例の多い青森市域・八戸市域の遺跡のデータ抽出から作業を開始した。

② 4道県での時期ごとの分布図作成

平成24年度に作成した円筒土器出土遺跡リストを利用し、北海道・北東北4道県の時期ごとの遺跡分布図を作成した。

③ 青森市・八戸市での時期ごとの分布図作成

青森市・八戸市の円筒土器文化期の時期ごとの遺跡分布図を作成した。さらに竪穴建物検出数を遺跡分布図上に表現し、集落規模と消長を示した。

平成25年度の成果

① 時期ごとの遺跡数の把握

時期ごと（前期中葉（円筒下層 a・b 式期）・前期後葉（円筒下層 c・d 式期）・中期前葉（円筒上層 a・b・c 式期）・中期中葉（円筒上層 d・e 式期）・中期後葉（榎林・最花式期））の円筒土器及び大木系土器の出土遺跡数変化を把握した。遺跡数が最大となるのは、縄文時代前期後葉～中期前葉であり、その後、中期中葉～後葉へと減少傾向にある。

② 遺跡分布の推移の把握

縄文時代前期後葉～中期前葉に、北海道の石狩

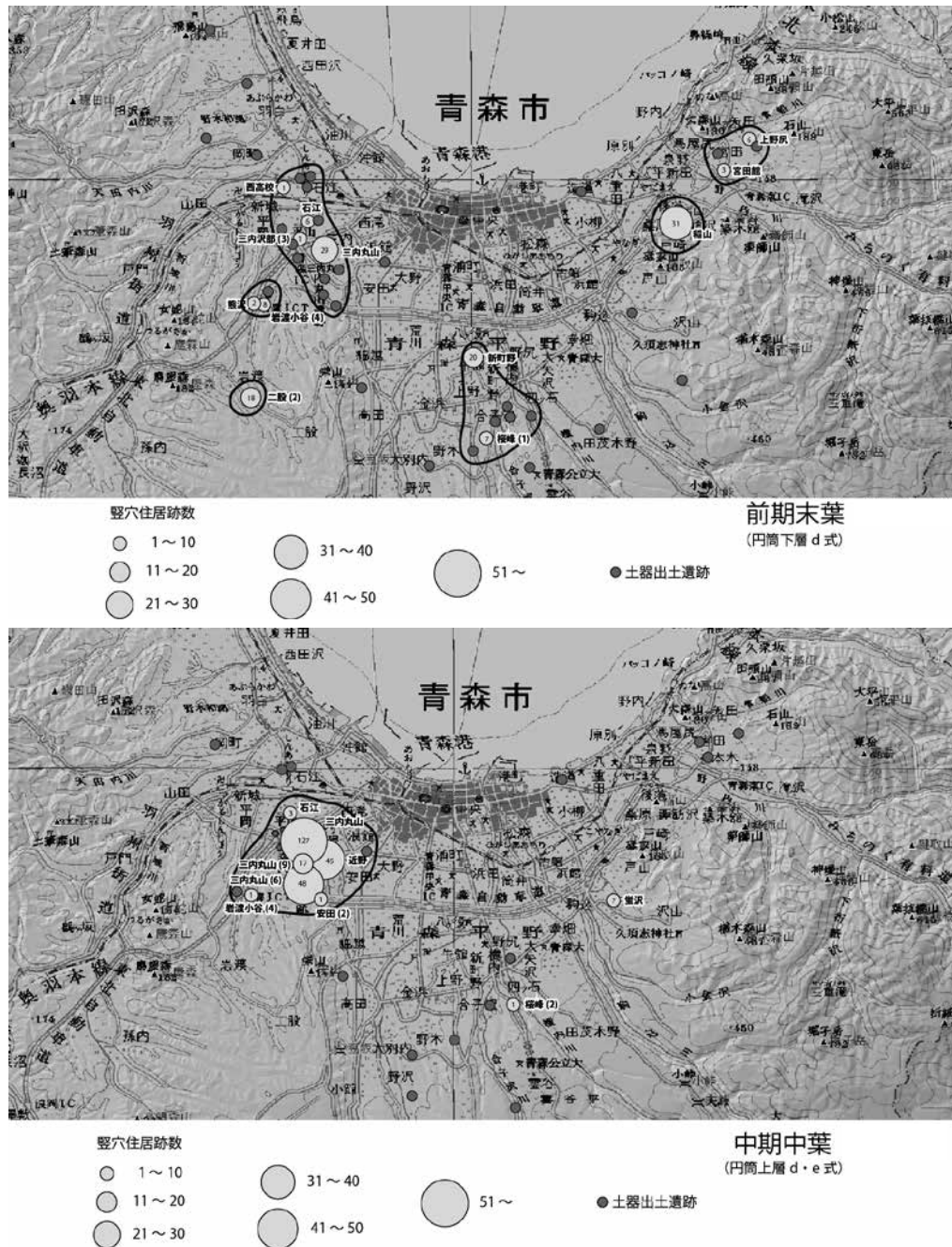
低地帯や秋田県南地域で、円筒土器出土遺跡が増加し、前時期よりも南北にやや分布の広がりを見せる。この時期には円筒土器文化圏を越えた遠隔地でも、円筒土器やその影響を受けた土器が出土する。

③ 青森市・八戸市における竪穴建物跡を検出した集落の推移の把握

青森市域では、前期段階では東と南と西の3箇所程度に集中していた集落遺跡が、中期に西の三

内丸山遺跡周辺に集中する傾向を示している。

八戸市域では、前期中・後葉には、新井田川中下流域に竪穴住居跡の検出数が多いが、中期前葉には市北部の笹ノ沢（3）遺跡で大規模な集落跡が突如現れ、土器一型式期程度の短期間で姿を消している。また遺跡数が顕著に減少した中期中・後葉には、新井田川下流域の松ヶ崎遺跡に集中が見られる。



青森平野と周縁丘陵における縄文時代前期末葉と中期中葉の遺跡立地図

③普及啓発

(1) シンポジウム等

○縄文宵待ちフォーラム

日時：平成25年9月21日（土）

15：30～17：00

会場：縄文時遊館（縄文シアター）

主催：縄文大祭典実行委員会

講師：岡村 道雄

（奈良文化財研究所名誉研究員）

岡田 康博

（青森県教育庁文化財保護課長）

テーマ：Theじょうもん検定公開講座

～最新情報も含めて～

主催：縄文遺跡群世界遺産登録推進本部

内容：

講演「人類史における縄文遺跡群の価値」

小林達雄（國學院大學名誉教授）

「北海道・北東北の縄文遺跡群の特徴」

岡村道雄（奈良文化財研究所名誉研究員）

「近年の世界遺産登録の動向」

稲葉信子（筑波大学大学院教授）

報告「北海道・北東北の縄文遺跡群の顕著な普遍的価値」

菊池徹夫（早稲田大学名誉教授）

「北海道・北東北の縄文遺跡群の現状と課題」

岡田康博（青森県教育庁文化財保護課長）

○北海道・北東北の縄文遺跡群世界遺産登録推進フォーラム

日時：平成25年11月30日（土）

10：00～17：00

平成25年12月1日（日）

10：00～16：00

会場：ELMホール

主催：縄文遺跡群世界遺産登録推進本部

内容：

①「北海道・北東北の縄文遺跡群」を構成する青森県の9遺跡の解説

②「北海道・北東北の縄文遺跡群」を構成する5遺跡の出土品の展示・解説

③「北海道・北東北の縄文遺跡群」の価値
縄文遺跡群世界遺産登録推進会議座長
岡田 康博（青森県教育庁文化財保護課長）

○北海道・北東北の縄文遺跡群世界遺産登録推進フォーラム

日時：平成26年1月26日（日）

10：00～15：30

会場：有楽町朝日ホール

○三内丸山遺跡報告会

日時：平成26年3月15日（土）

13：00～15：15

会場：縄文時遊館（縄文シアター）

主催：青森県教育委員会

内容：

第1部 発掘調査成果報告

「平成25年度三内丸山遺跡発掘調査成果報告」

青森県教育庁文化財保護課 三内丸山遺跡保存活用推進室

第2部 特別研究成果報告

「北東北における円筒土器文化の変容過程に関する考古学的研究」

永瀬史人（青森県埋蔵文化財調査センター）

「縄文土器の紐積み方法と素地選択の復元、および、それらの技術を選択した理由の解明」

小林正史（北陸学院大学人間総合学部）

第3部 円筒土器文化総合研究報告

「円筒土器文化の集落データベース作成による研究」

青森県教育庁文化財保護課 三内丸山遺跡保存活用推進室

(2) 企画展及び最新情報展

三内丸山遺跡への理解を促進するため、調査及び研究で明らかとなった最新情報を展示する企画展及び最新情報展を開催した。

①「穴（あな）・視（のぞ）・考（こう）」

期間：平成25年9月14日（土）

～平成26年3月2日（日）

内容：縄文時代の遺物には、穴のあけられたものがみられ、三内丸山遺跡でも、穴のあけられた様々な種類の遺物が多く出土している。土器や土偶、土・石製品などにあけられた穴を観察し、その目的や用途を考え、穴をあけるための道具についての紹介を行った。

②「第37次発掘調査最新情報展～西盛土西側の発掘」

期間：平成26年3月15日（土）～8月31日（日）

内容：平成25年度の第37次発掘調査に関する成果報告を行った。西盛土西側から出土した土器・石器・土製品・石製品や、調査時の写真などを展示した。第37次発掘調査で見つかった土坑墓と以前の調査で見つかった特徴的な土坑墓を紹介した。あわせて予備調査の行われた北端部の出土遺物も展示した。



「第37次発掘調査最新情報展」の様子

(3) 三内丸山縄文教室

三内丸山遺跡では、発掘調査から得られた成果をもとに、縄文時代の生活の一端を体験する「さんまる縄文体験」を、平成8年度から実施している。また、平成21年度からは、高校生以上を対象に、体験と講義をセットにした「さんまる縄文講座」を開催している。

「さんまる縄文体験」

平成25年度は5月から11月までに、1回コースを8回、2回コースを1回の計9回行った。できるだけ縄文時代と同じ材料を使い、より専門性を求めて、講師を依頼したものもある。また実施にあたっては、いずれも三内丸山応援隊の協力を得た。

【1回コース】

①「黒曜石で矢じりを作ろう！」

実施日：平成25年5月18日（土）

内容：黒曜石で矢じりを製作し、弓矢の使用体験を行い、縄文時代の狩猟について理解を深めた。

講師：文化財保護課職員

参加者：26名

②「イノシシの骨でぬい針を作ろう！」

実施日：平成25年6月15日（土）

内容：イノシシの肋骨でぬい針を製作し、^{ししゅう}刺繍をする体験を行い、縄文時代の資源利用について理解を深めた。

講師：文化財保護課職員

参加者：12名

③「縄文土器に色をつけてみよう！」

実施日：平成25年7月20日（金）

内容：赤鉄鉱を粉碎した後、水^ひ簸して赤色顔料を製造し、土器に塗る体験を行い、縄文時代の顔料について理解を深めた。

講師：文化財保護課職員

参加者：10名

④「さんまる発掘体験」

実施日：平成25年8月8日（木）

内容：発掘作業を体験し、目的や方法などについて理解を深めた。

講師：文化財保護課職員

参加者：26名



さんまる発掘体験

⑤「土偶のレプリカを作ろう！」

実施日：平成25年8月10日（土）

内容：遺跡から出土した土偶のレプリカを製作し、その意義や資料の取り扱い方について理解を深めた。

講師：堀江 武史氏（府中工房）

参加者：14名



土偶のレプリカを作ろう！

⑥「鹿の角で釣り針を作ろう！」

実施日：平成25年10月5日（土）

内容：鹿角で釣り針を製作し、実際にニジマスを釣る体験を行い、食料獲得方法について理解を深めた。

講師：文化財保護課職員

参加者：19名

⑦「岩偶と石のペンダントを作ろう！」

実施日：平成25年9月28日（土）

内容：岩偶と石製垂飾品を製作し、形態や用途について理解を深めた。

講師：文化財保護課職員

参加者：22名

⑧「木の実を調理してみよう！」

実施日：平成25年11月16日（土）

内容：クルミ割りやクリとトチノミの皮むき、トチノミのアク抜き体験を行い、調理方法について理解を深めた。

講師：文化財保護課職員

参加者：7名

【2回コース】

①「縄文土器と土偶を作ろう①」

実施日：平成25年7月6日（土）

内容：遺跡周辺で採取した粘土で土器と板状土偶を製作し、土器と土偶の製作方法などについて理解を深めた。

講師：誉田 実氏（陸奥美窯）

参加者：7名

②「縄文土器と土偶を作ろう②」

実施日：平成25年9月14日（土）

内容：①で作った土器と土偶を野焼きし、焼成技法などについて理解を深めた。

講師：文化財保護課職員

参加者：8名



野焼きの様子

「さんまる縄文講座」

平成25年度は、6月から10月までの土・日曜日に、「縄文の家とムラ」をテーマとして5回の講座を行った。

第1回「縄文の家とムラの様子」

実施日：平成25年6月22日（土）

講師：文化財保護課職員

内容：三内丸山遺跡のムラの様子と家の構造についての講義と、竪穴住居の模型作りを行った。

参加者：22名

第2回「森のめぐみと家づくり」

実施日：平成25年7月13日（土）

講師：鈴木三男氏（東北大学名誉教授）

内容：三内丸山遺跡周辺の森の様子とその利用状況についての講義と、石斧の使用体験を行った。

参加者：21名

第3回「縄文人の道具」

実施日：平成25年8月25日（日）

講師：文化財保護課職員

内容：縄文人の道具の素材や製作技術についての講義と、樹皮を用いた編み籠作りを行った。

参加者：26名

第4回「縄文人と土器」

実施日：平成25年9月7日（土）

講師：文化財保護課職員

内容：円筒土器の製作技術や文様の特征についての講義と、小型土器作りを行った。

参加者：27名

第5回「縄文のマツリ」

実施日：平成25年10月19日（土）

講師：文化財保護課職員

内容：縄文時代のムラで行われたマツリについての講義と、粘板岩のペンダント作りを行った。

参加者：13名

「ギャラリートーク」

平成25年度から三内丸山遺跡及び縄文文化について理解を深めてもらうため、6月から11月までの毎週日曜日にさんまるミュージアムの展示を活用してテーマごとにギャラリートークを行った。

①「旅するヒスイ」

日時：平成25年6月2日・30日、7月28日、
9月8日、10月13日

内容：縄文時代のヒスイと人の移動について解説した。

参加者：延べ50名

②「狩りの石器」

日時：平成25年6月9日、7月7日、8月18日、
9月22日、10月27日

内容：狩りに使用された石器の種類、用途、形態の変化及び狩りの様子を民族・民俗例、他遺跡の事例等を参考に解説した。

参加者：延べ73名

③「土器に葬られた子ども」

日時：平成25年6月16日、7月14日、8月25日、
9月29日、11月3日

内容：棺として使用された土器の特徴と副葬品を紹介し、民族・民俗例、他遺跡の事例等を参考に子供の墓について解説した。

参加者：延べ48名

④「盛土で送られたモノたち」

日時：平成25年6月23日、7月21日、9月1日、10月6日、11月24日

内容：盛土から出土する遺物の特徴を説明し、民族・民俗例、他遺跡の事例等を参考に「送り」などについて解説した。

参加者：延べ33名

⑤「企画展「穴・覗・考」」

日時：平成25年9月15日、10月20日、11月10日・17日

内容：企画展示中の「穴・覗・考」について、展示品や穿孔の方法について解説した。

参加者：延べ18名



ギャラリートークの様子

（４）三内丸山遺跡魅力アップ推進事業

〈1〉「さんまるムラづくり体験事業」

①縄文家づくり体験

期間：平成25年6月22日～11月9日

回数：一般県民6回 三内西小学校5回
新城小学校4回

参加対象

〈一般〉

募集期間：平成25年5月20日～6月21日

募集定員：一般県民60名

応募者：30名 延べ参加者124名

〈学校〉

参加校：青森市立三内西小学校4学年80名
青森市立新城小学校6学年54名

活用する竪穴住居：

樹皮葺き竪穴住居 第173号・第186号

土葺き竪穴住居 第436号（土日コース）
第181号（平日コース）

②さんまる縄文講座（勉強会）

家づくりの内容と関連させながら、縄文人の生活をイメージし、理解しやすい内容で5回の講座を行った。

期間：平成25年6月22日～10月19日

募集定員：一般県民30名

応募者：48名

延べ参加者：109名

内容については、11ページの「さんまる縄文講座」を参照。

【縄文の家づくり体験概要】

（1）第173号・第186号樹皮葺き竪穴住居の復元

①解体と観察

第173号・第186号樹皮葺き竪穴住居

・実施日：平成25年6月18日（火）

・参加者：関連団体（三内丸山応援隊）10名

※体力を要するものについては、安全上の観点から、

関連団体の希望する大人が参加することとした。

- ・内容：樹皮屋根・軸組の取り外し、状況の観察を行った。

②材料準備

第173号樹皮葺き竪穴住居

- ・実施日：平成25年7月12日（金）
- ・参加者：三内西小学校80名

第186号樹皮葺き竪穴住居

- ・実施日：平成25年7月4日（木）
- ・参加者：新城小学校54名

家づくりサポーター2名

※家づくりサポーター：平成24年度縄文の家づくり体験の参加者で、平成25年度の体験の補助をしていただいた方々である。

- ・内容：

ア クリ材丸太の樹皮剥き体験

直径12cm、長さ1mのクリ材の樹皮を、木のくさび、木槌を使用して剥いた。剥いた樹皮は屋根材として使用した。



樹皮剥き体験

イ 石斧使用による丸太横切断体験

アの丸太を石斧で50cm程度に切断した。

ウ 丸太の縦半割体験

イの丸太を木のくさびと木槌で縦半割にした。半割した丸太には参加者の名前等を彫り込み、竪穴住居内に記念プレートとして設置する予定とした。

※第173号は雨により、アのみの体験となった。

ウの体験は④屋根葺きの回に合わせて行った。

③軸組組立

第173号樹皮葺き竪穴住居

- ・実施日：平成25年8月30日（金）
- ・参加者：応援隊5名 家づくりサポーター1名

第186号樹皮葺き竪穴住居

- ・実施日：平成25年10月15日（火）
- ・参加者：新城小学校54名

家づくりサポーター1名

※第186号については、イ垂木の立てかけと結束のみ、次の④屋根葺きの回に合わせて行った。

- ・内容：

ア 事前作業

4本の主柱及び3段の曲がり母屋を設置した。

イ 垂木の立てかけ及び曲がり母屋への結束

垂木を母屋に立てかけ、荒縄により結束した。

ウ 住居の扉の製作

クリ枝材とクリ樹皮を使用した。結束のため樹皮に縄を通す穴は石錐を使用して開けた。

エ 火棚及び出入り口用すだれ編み製作

細い枝材を仮組みしておいたものを麻紐で結束した。

④屋根葺き

第173号樹皮葺き竪穴住居

- ・実施日：平成25年9月5日（木）
- ・参加者：三内西小学校80名

家づくりサポーター1名

第186号樹皮葺き竪穴住居

- ・実施日：平成25年10月15日（火）
- ・参加者：新城小学校54名

家づくりサポーター1名

- ・内容：

ア 樹皮の屋根葺き

事前に穴をあけておいた樹皮を母屋に麻紐で結束した。



樹皮葺きの様子

イ シナノキ繊維による縄ない

シナノキ樹皮から採取した繊維を使用し、縄ないを行った。

⑤完成仕上げ

第173号樹皮葺き竪穴住居

・実施日：平成25年9月27日（金）

・参加者：三内西小学校80名

家づくりサポーター1名

第186号樹皮葺き竪穴住居

・実施日：平成25年10月29日（火）

・参加者：新城小学校54名

家づくりサポーター1名

・内容：ネームプレート、土器レプリカ、出入り口の簾、樹皮扉を設置し、家を完成させた後、さんまる縄文人認証書授与及び宣誓等を行った。

（2）第436号・第181号土葺き竪穴住居の復元

①解体と観察

第436号土葺き竪穴住居

・実施日：平成25年6月22日（土）

・参加者：一般県民14名

家づくりサポーター9名

第181号土葺き竪穴住居

・実施日：平成25年6月28日（金）

・参加者：一般県民7名

家づくりサポーター2名

・内容：

ア 屋根土の堆積状況記録と除去

屋根土の堆積状況を観察後、掘り棒、箕、もっこを使用し除去した。

イ 屋根下地の状況記録と除去

土屋根下地の茅の状況と結束状況等を記録し、除去した。

ウ 軸組の状況観察と撤去

軸組の折れ具合、腐朽の程度を観察し、解体した。

②材料準備

第436号土葺き竪穴住居

・実施日：平成25年7月13日（土）

・参加者：一般県民12名

家づくりサポーター10名

第181号土葺き竪穴住居

・実施日：平成25年7月19日（金）

・参加者：一般県民12名

家づくりサポーター2名

・内容：

ア 垂木の加工

垂木の樹皮剥きの後、先端部分を加工した。

イ ネームプレートの素材作成

クリ丸太の樹皮を木のクサビ、木槌、石斧で剥いた後、横に2分割、更に縦に2分割した。

ウ シナノキ繊維による縄ない

シナノキ樹皮から繊維の取り方を説明した後、縄ないを行った。

③軸組組立

第436号土葺き竪穴住居

・実施日：平成25年8月25日（日）

・参加者：一般県民16名

家づくりサポーター4名

・内容：

第181号土葺き竪穴住居

・実施日：平成25年10月3日（木）

・参加者：一般県民8名

家づくりサポーター1名

・内容：

ア 垂木の立てかけ及び梁・桁との結束作業

垂木、棟木を立てかけた後、荒縄で梁・桁と結束した。

イ 出入り口部材の加工・組み立て作業

石ノミと木槌で出入り口骨組みの組み合わせ部分を加工した。その後、体験者が製作したシナノキ繊維の縄を使用し、結束した。



軸組組立の様子

④屋根葺き1回目

第436号土葺き堅穴住居

・実施日：平成25年9月7日（土）

・参加者：一般県民16名

家づくりサポーター4名

第181号土葺き堅穴住居

・実施日：平成25年10月17日（木）

・参加者：一般県民4名

家づくりサポーター2名

・内容：

ア 下地茅の設置と結束

茅束を下から順に横置きに設置し、槍と荒縄で垂木に結束した。

イ 火だな製作

石ノミで重なる部分を敷仕口加工した後、参加者が作成した縄で結束した。

ウ 出入り口・壁面用簾編み

こもつち菰藁と茅を用いて簾を編む作業を行った。

⑤屋根葺き2回目

第436号土葺き堅穴住居

・実施日：平成25年9月29日（日）

・参加者：一般県民9名

家づくりサポーター2名

第181号土葺き堅穴住居

・実施日：平成25年10月31日（木）

・参加者：一般県民10名

家づくりサポーター2名

・内容：

ア 土葺き

第436号では赤土、第181号では黒土を使用した。屋根裾にそだ材を置いた上にもっこで運搬した土を被せ、土たたき具でたたき締めた。



土葺きの様子

イ 看板作成及び薪割り

クルミの丸太から看板に使用する板材を割り取った。また、野焼き用燃料として杉の丸太を細く切った。

⑥完成仕上げ

第436号・第181号土葺き堅穴住居

・実施日：平成25年11月9日（土）

・参加者：一般県民28名

家づくりサポーター10名

・内容：

各住居内に内装物（ネームプレート・火だな・出入り口簾・表札）を設置した後、さんまる縄文人認証書授与及び宣誓、火おこし・野焼き・土器

調理の体験、石棒焼成実験を行った。

〈2〉「さんまる魅力発信事業」

縄文文化と三内丸山遺跡の魅力と価値を国内外に強力に発信し、見学者の増加を図るため、次の事業を実施した。

①ホームページのリニューアル

英語・韓国語・中国語で閲覧できるホームページを作成した。

②遺跡内看板の設置

見学者により遺跡を理解してもらえるよう、外国語（英語・韓国語・中国語）入りで看板を設置した。

③縄文時遊館シアター映像製作事業

最新情報による縄文シアター映像を制作した。

④リーフレット

三内丸山遺跡及び縄文文化について平易に楽しく理解してもらうため、子ども向けパンフレット「さんまるミュージアムわくわくガイドブック」・「縄文探検マップ」を発行した。

⑤さんまるミュージアム内の表示

英語の併記を行った。



「縄文探検マップ」

（5）印刷物の発行

①『特別史跡三内丸山遺跡年報』17

A 4 86ページ 500部発行

平成24年度の事業、見学者の動向、研究ノート、特別研究推進事業成果概要報告、日誌抄録。

②『青森県埋蔵文化財調査報告書 第546集 三内丸山遺跡41－旧野球場建設予定地発掘調査報告書14 北の谷（1）－』

A 4 209ページ 370部発行

平成4～6年度に調査した、旧野球場建設予定地の発掘調査のうち、北の谷から出土した土器・石器・土偶・土製品に関する報告書。

③「三内丸山通信」

A 3 両面刷り 各3000部発行

三内丸山遺跡の調査、イベント、トピックスなどの最新情報を掲載したニュースレター。

【第57号（平成25年4月19日発行）】

- ・最新の研究成果まとまる
- ・平成24年度第3回企画展「西盛土の発掘」のお知らせ
- ・さんまる縄文体験始まる！
- ・縄文の家を復元します！
- ・縄文遺跡群を東京でアピール！
- ・縄文春祭りのお知らせ

【第58号（平成25年7月16日発行）】

- ・見に来て 発掘
- ・「さんまるギャラリートーク」開催中
- ・平成25年度企画展「のぞいてみよう！穴からのぞく三内丸山（仮）」
- ・期間限定縄文ポシエット公開
- ・縄文大祭典のお知らせ
- ・縄文の家づくり体験参加者大募集！
- ・さんまる縄文体験始まる

- ・世界遺産登録に向けて

【第59号（平成26年1月9日発行）】

- ・発掘調査終了
- ・見学者50万人達成 さんまるミュージアム
- ・世界遺産縄文講座で学ぼう
- ・冬のイベント情報
- ・縄文の家づくり完成イベント
- ・縄文大祭典・秋祭り開催
- ・体験したよ！「さんまる縄文体験」



三内丸山通信 第59号

(6) 資料貸出

平成25年度の出土遺物及びレプリカの貸し出し状況は以下のとおりである。このほかに、新潮社が出版する『青森縄文王国』に使用する重要文化財等の写真撮影が行われた。

①青森県立郷土館 常設展示

平成25年4月1日～平成26年3月31日

土器等33点

②青森県立美術館特別展示「青森EARTH2013」

平成25年6月12日～同年9月13日

石棒・土偶・土器破片44点

③「青森県の縄文遺跡群」世界遺産をめざす会「青森県の縄文遺跡」

平成25年7月18日～同年7月21日

土器レプリカ等12点

④青森県立郷土館開館40周年記念特別展「平尾魯仙～青森のダ・ヴィンチ～」

平成25年9月11日～同年11月15日

土器1点

⑤北海道環境生活部くらし安全局文化・スポーツ課 縄文世界遺産推進室「北の縄文と美の世界」

平成25年10月3日～同年10月17日

土偶レプリカ等2点・映像資料2点

⑥北海道環境生活部くらし安全局文化・スポーツ課 縄文世界遺産推進室 「北の縄文パネル展2013」

平成25年10月17日～同年10月29日

青色片岩・緑色岩製磨製石斧2点・ヒスイ大珠レプリカ等7点

⑦株式会社CUBIC

「オルソ画像を用いたソフトウェア」開発

平成25年10月18日～平成26年1月31日

土器等2点

(7) 講演会等

三内丸山遺跡に対する理解や関心を深めてもらうため、主催者の依頼に応じた講義を行った。平成25年度に行った講義等は、以下の通りである。

8月8日

「郷土の文化を学ぶ」

平成25年度初任者研修（小・中学校）「教職一般研修講座」講義

青森県教育委員会

場所：青森県総合学校教育センター

11月14日

出前トーク「三内丸山遺跡ってどんな遺跡」

三沢市シルバー人材センター

場所：三沢市役所保健相談センター

○世界遺産縄文講座

7月11日

七戸町立天間西小学校

受講者：6年生87名

講師：文化財保護課職員

場所：七戸町立天間西小学校

十和田市立南小学校

受講者：6年生53名

講師：文化財保護課職員

場所：十和田市立南小学校

7月12日

青森市立筒井南小学校

受講者：6年生130名

講師：県知事・文化財保護課長

場所：青森市立筒井南小学校

9月5日

八戸市立図南小学校

受講者：6年生40名

講師：教育長・文化財保護課長

場所：八戸市立図南小学校

9月26日

板柳町立板柳南小学校

受講者：6年生36名・5年生53名

講師：文化財保護課職員

場所：板柳町立板柳南小学校

10月2日

八戸工業大学第二高等学校

受講者：2年生60名

講師：文化財保護課職員

場所：八戸工業大学第二高等学校

10月3日

青森市中学校教育研究会社会科部会

受講者：中学校教諭30名

講師：文化財保護課職員

場所：青森市立新城中学校

10月5日

青森県立田名部高等学校

受講者：高校1～3年生53名

講師：文化財保護課職員

場所：青森県立田名部高等学校

10月25日

青森大学オープンカレッジ

受講者：オープンカレッジ受講生40名

講師：文化財保護課職員

場所：青森大学

12月7日

むつ市文化財ボランティアの会

受講者：一般市民・学生40名

講師：文化財保護課職員

場所：むつ市立図書館

(8) 縄文まつり

平成25年度に縄文時遊館で行ったイベント（普及啓発プログラムを除く）は以下のとおりである。

○縄文春祭り

主催：青森県教育庁文化財保護課

実施日：平成25年4月27日～5月6日

内容：クイズラリー、縄文ファッションで記念撮影、チャレンジ！ザ・じょうもん（木のくさびで丸太割り、石の斧で木の分割体験）、津軽三味線ライブ、縄文パノラマビュー（高所作業車に乗って遺跡を見学）などを開催した。



チャレンジ！ザ・じょうもんの様子

○縄文夏祭り

主催：三内丸山文化観光拠点づくり支援協議会

実施日：平成25年7月27日～8月18日

内容：紙飛行機教室、シャボン玉教室、こんちゅう教室、おもちゃ作り、クイズラリーなどを開催した。

○第15回縄文大祭典

主催：縄文大祭典実行委員会

実施日：平成25年9月21日・22日・23日

内容：発掘調査現地説明会、縄文ワークショップ、縄文宵待ちフォーラム、お月見コンサート、月の宴、縄文パノラマビュー、クイズラリー、縄文グッズ作り体験、縄文生活体験（火おこし体験）などを開催した。

○縄文秋祭り

主催：三内丸山観光拠点づくり支援協議会

実施日：平成25年11月9日・10日

内容：森の恵みで遊ぼうクラフト展、「昔っこ」のあそび、縄文生活体験（縄文編みもの体験、縄ない体験、火おこし体験）、クイズラリー、縄文ものづくり体験（土偶作り、琥珀の勾玉作り）、縄文土器野焼き見学会、じゃがいも焼き、くるみ割り体験などを開催した。

○縄文冬祭り

主催：青森県教育庁文化財保護課

実施日：平成26年2月15日・16日

内容：さんまる宝さがしウォーキング・冬、クイズラリー、大型すべり台で遊ぼう、雪だるま作り、縄文生活体験（編布体験、網代編みのコースター作り、骨で作ったぬい針を使った刺繍体験）などを開催した。



さんまる宝さがしウォーキング・冬

Ⅱ 平成25年度の見学者動向について

(1) 遺跡見学者数及びさんまるミュージアム見学者数

平成25年度の遺跡見学者数は288,617人、うち「さんまるミュージアム」（以下ミュージアム）の見学者数は175,937人である。

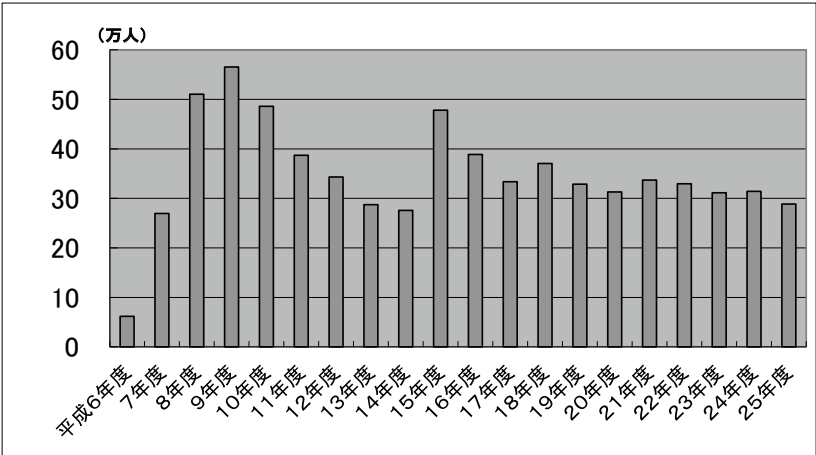
月ごとの遺跡見学者数は多い順から8月、9月、5月となっている。これはねぶた祭り、縄文大祭典等のイベントによる観光客の増加が要因であると考えられる。また、冬季の見学者数については例年同様12月～3月にかけて減少している。

ミュージアムの見学者数は、遺跡見学者数

の61.0%である。冬期間（1～3月）におけるミュージアムの見学者割合が77.4%と高く、夏期間（7～9月）における割合が54.6%と少ない。

冬期間割合が高い理由としては、個人見学者の割合が高く、一般団体見学者に比べ時間に余裕があるためと推測される。また、ミュージアムが縄文時遊館内に開設されたことから、冬季であっても天候に左右されず見学する人も多いためと考えられる。

年 度	見学者数	前年比(%)
平成6年度	61,807	-
7年度	269,597	436.2
8年度	510,337	189.3
9年度	565,376	110.8
10年度	485,917	85.9
11年度	387,021	79.6
12年度	343,050	88.6
13年度	287,182	83.7
14年度	275,551	95.9
15年度	478,165	173.5
16年度	388,652	81.3
17年度	333,583	85.8
18年度	370,447	111.1
19年度	328,815	88.8
20年度	312,964	95.2
21年度	337,035	107.7
22年度	329,374	97.7
23年度	311,513	94.6
24年度	314,235	100.9
25年度	288,617	91.8
計	6,979,238	

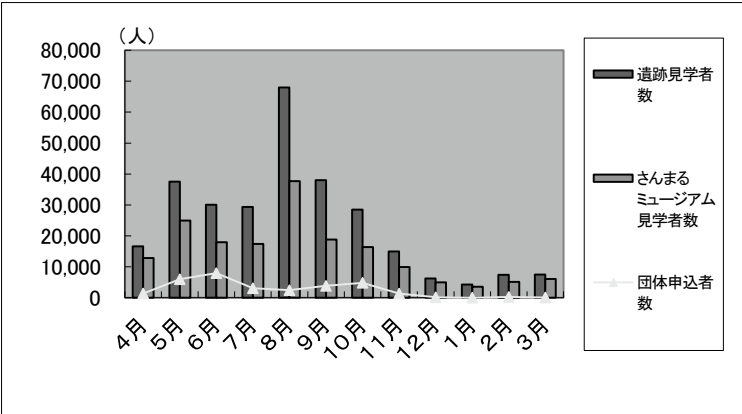


グラフ1 平成25年度までの遺跡見学者数

表1 平成25年度までの遺跡見学者数

月	遺跡見学者数	さんまるミュージアム見学者数	団体申込者数
4月	16,649	12,836	1,384
5月	37,524	24,989	5,985
6月	30,079	17,986	7,957
7月	29,387	17,397	3,070
8月	68,019	37,703	2,446
9月	38,039	18,834	3,843
10月	28,525	16,410	4,839
11月	14,980	9,925	1,341
12月	6,238	5,017	151
1月	4,308	3,575	39
2月	7,404	5,149	276
3月	7,465	6,116	99
計	288,617	175,937	31,430

表2 平成25年度見学者数



グラフ2 平成25年度見学者数

(2) 団体見学者の傾向

団体の見学者数は31,430人で、見学者全体に占める割合は10.9%である。このうち県内の利用は約33.3%で、小学校の利用が多い。また、県外からの利用は約66.7%で、一般団体の利用が多い。団体見学者が最も多いのは6・5・10月で、5～6月は修学旅行などの学校見学者が約80%を占める。10月は学校関係者は少なく一般見学者が多い。8月は遺跡全体の見学者が最も多いが、団体見学者の割合は少ない。これは、ねふた期間中は見学者が集中するため、定時ガイドを増やすこと

で対応し、団体予約を受け付けていないためである。また、冬季の団体見学者は少なく、学校団体の見学はほとんどない。

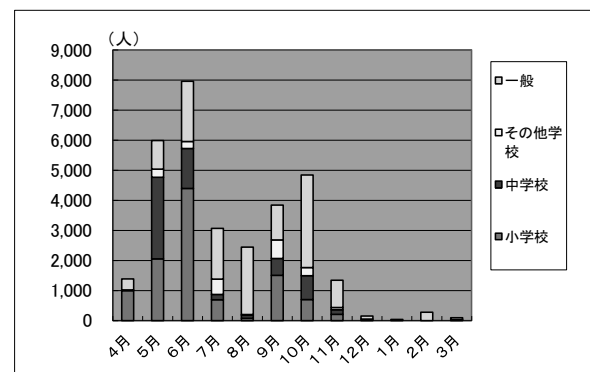
修学旅行での利用は、小学校が約60%を占める。地域別では北海道が多く、修学旅行生全体の50%を占める。その他の地域の利用割合は、昨年度と比較すると東北地域の学校が減少している。

また、県内の学校団体では、小学校に比べて中学校の利用は少ない。

平成25年度の学校団体の見学者数は、県外で10,784人、県内で7,786人となっている。

月	小学校		中学校		その他学校		一般		総計	
	学校数	人数	学校数	人数	学校数	人数	団体数	人数	団体数	人数
4月	21	994	1	27	0	0	21	363	43	1,384
5月	46	2,056	28	2,709	5	269	53	951	132	5,985
6月	72	4,392	11	1,330	5	233	85	2,002	173	7,957
7月	18	693	2	180	6	508	83	1,689	109	3,070
8月	2	78	2	101	2	27	100	2,240	106	2,446
9月	27	1,504	7	565	9	615	64	1,159	107	3,843
10月	11	700	6	796	3	267	108	3,076	128	4,839
11月	5	208	2	153	1	78	38	902	46	1,341
12月	2	55	0	0	0	0	7	96	9	151
1月	0	0	0	0	0	0	5	39	5	39
2月	0	0	0	0	0	0	12	276	12	276
3月	0	0	0	0	1	32	3	67	4	99
計	204	10,680	59	5,861	32	2,029	579	12,860	874	31,430

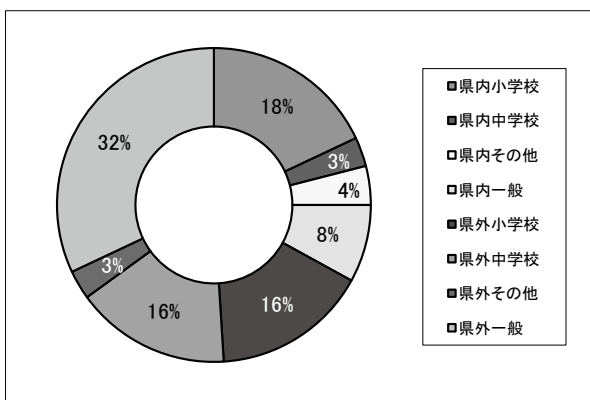
表3 平成25年度団体見学者数



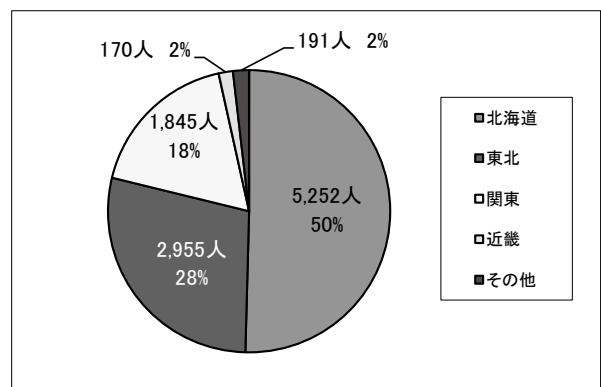
グラフ3 平成25年度団体見学者数

県内外別	小学校		中学校		その他学校		一般		総計	
	学校数	人数	学校数	人数	学校数	人数	団体数	人数	団体数	人数
県内	118	5,739	13	898	20	1,149	103	2,681	254	10,467
県外	86	4,941	46	4,963	12	880	476	10,179	620	20,963
計	204	10,680	59	5,861	32	2,029	579	12,860	874	31,430

表4 平成25年度団体見学者の地域別見学者数



グラフ4 平成25年度団体見学者数の割合



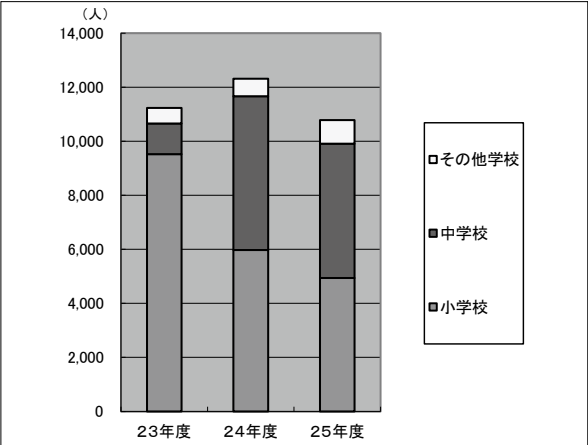
グラフ5 平成25年度修学旅行生の地域別割合

県外の学校の見学者数は、昨年度と比較すると
その他学校で増加し、小学校・中学校で減少して
いる。

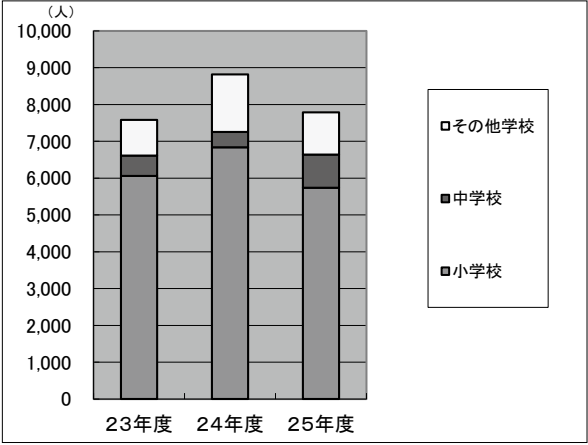
また、県内学校については、昨年度と比較する
と中学校で増加し、小学校・その他学校で減少し
ている。

註) カウント方法、カウント場所は次のとおり
である。

- ・遺跡・ミュージアム見学者数：縄文時遊館入
口でセンサーによりカウント
- ・団体見学者数：事前に見学申込のあった団体
見学者で三内丸山応援隊がカウント



グラフ 6 県外学校の見学者数



グラフ 7 県内学校の見学者数

年度	小学校		中学校		その他学校		総計		前年比(%)	
	学校数	人数	学校数	人数	学校数	人数	団体数	人数	団体数	人数
23年度	173	9,521	14	1,135	6	575	193	11,231	119.1	82.5
24年度	99	5,977	57	5,685	8	652	164	12,314	85.0	109.6
25年度	86	4,941	46	4,963	12	880	144	10,784	87.8	87.6

表 5 県外学校の見学者数

年度	小学校		中学校		その他学校		総計		前年比(%)	
	学校数	人数	学校数	人数	学校数	人数	団体数	人数	団体数	人数
23年度	120	6,058	10	555	20	970	150	7,583	94.9	93.2
24年度	132	6,836	9	416	19	1,567	160	8,819	106.7	116.3
25年度	118	5,739	13	898	20	1,149	151	7,786	94.4	88.3

表 6 県内学校の見学者数

Ⅲ 研究ノート

①三内丸山遺跡出土の異形石器の再検討

岩田 安之（青森県教育庁文化財保護課）

1 はじめに

「異形石器」と分類される石器があるが研究事例が少なく、定義もあいまいであるため、詳しく検討されていないのが現状である。

久保田健太郎は「土偶や石棒など様々な第二の道具の研究が蓄積される一方で、異形石器についてはほとんど関心が払われてこなかった」と、異形石器の研究の少なさを指摘している（久保田2012）。

研究が少ないためか、よく異形石器はいわゆる「第一の道具」「第二の道具」のうち、よく後者として評価をされている場合が多い。しかし、異形石器として分類されたものには、日常的な道具類のような「第一の道具」としての石器という観点で整理する必要があるものも含まれていると考えられる。

これらから、本稿では三内丸山遺跡において、異形石器とされているものの整理を行い若干の考察を加えた。

2 これまでの研究

「異形石器」という名称は、幕末期の郷土史家であった羽柴祐輔が1887年に人類学雑誌で最初に使用したとされる（羽柴1886、鈴木2005）。その後、坪井正五郎が分類や考察を行っている。これらの研究史は鈴木克彦に詳しい（鈴木2005）。

このように古くから注目されている遺物ではあるが、異形石器に関する論考は非常に少ない。最近のまとまったものでは管見によれば、鈴木（鈴木2005）と久保田（久保田2012）ぐらいしかない。

鈴木「石偶に関する研究」（鈴木2005）では、石偶が中心で異形石器は副次的に扱われているが、北日本で後期後葉に石偶などと同様に急激に増えるとされている。また、異形石器は石鏃、石匙、石錐などの石器を変形させたものであるとしている^{（註1）}。

久保田も、異形石器は東北地方に多くみられ、「過剰デザインによってある剥片石器が異形化する」（久保田2012）ものがあり、とりわけ石匙の異形化を強調している。

両氏の論考において、異形石器は従来の定形的な石器の変形が多いと考えられているが、その関係性を議論する前提には、まず異形石器を整理する基礎的な作業が必要である。

久保田も述べているが（久保田2012）、異形石器という分類群自体は何かの属性に基づいて類型化されたものではない消極的な分類である。定形・不定形から外れた特殊なものであるという前提から、従来の石器とは異なるものという視点で考察されてきた可能性がある。

3 異形石器の見方（図1）

三内丸山遺跡で異形石器とされているものの大部分を図1に示した。他の遺跡の分類でも類似した形態のものが異形石器とされているため、同じような分類の手続きを踏んで、この石器群が認識されている。報告書などで一般的に行われている剥片石器の分類方法で、定形、不定形、異形の3種類があり、定形石器や不定形石器の分類に入らなかったものが異形石器とされている。

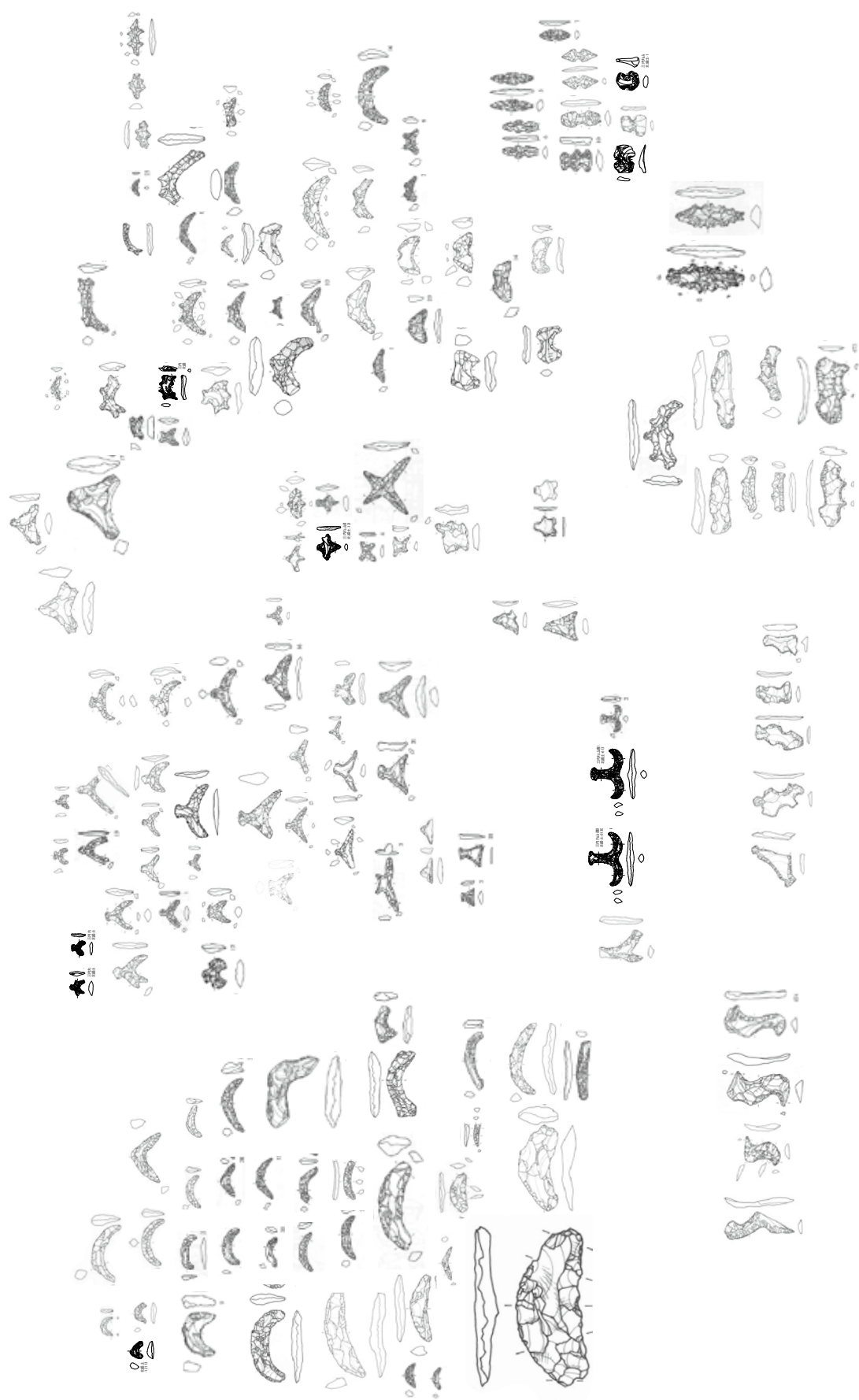


図1 三内丸山遺跡出土の異形石器（すべて三内丸山遺跡報告書から引用）

私たちが定形石器とみているものは、用途や機能が推定しやすいだけでなく、石匙の「つまみがある」というような特徴的な形態の基準で分類でき、なおかつ数量的にまとまりがあるため、類型化できるものである。一方で、不定形石器はその基準が設定できないものの一群である。

上述したように、異形石器は定形・不定形からはずれた一群である。しかし、三内丸山遺跡や他の遺跡から出土した異形石器をよくみると、その中には定形的や不定形的なものでとらえてもよいものがありそうである。後に詳しく扱うが、湾曲のある三日月形の石器は、定形的な石器として扱う方が適当なのではないかと考えられるものである。また石匙や動物形に見えるものは、挟りが入っているその部分を機能部とみれば不定形石器としてとらえることが可能である。

まとめると、定形・不定形・異形という3つの分類群の関係は図2のようになる。定形と異形、不定形と異形は重なり合う部分をもつ分類群であるとみることが可能であり、次の3種類に整理される

- ① 形態でまとまりをもつ分類群として分けられ、定形石器として理解できるもの
- ② 形態でまとめられないが、機能部と考えられる部分が存在し、不定形石器として理解できるもの
- ③ ①と②以外のもの

異形石器と定形石器・不定形石器を、互いに重なり合う部分がある関係としてみることによって、異形石器を石器の全体的な分類の中で整理することが可能であると考えられる。

つまり、異形石器という枠組みよりも、他の石器と同じような扱いで議論をすべき石器が異形石器の中に確実に存在する。定形石器や不定形石器ととらえれば、異形石器を「特殊な遺物」という先入観から解放することが可能になり、石器の用途などを再検討できると思われる。

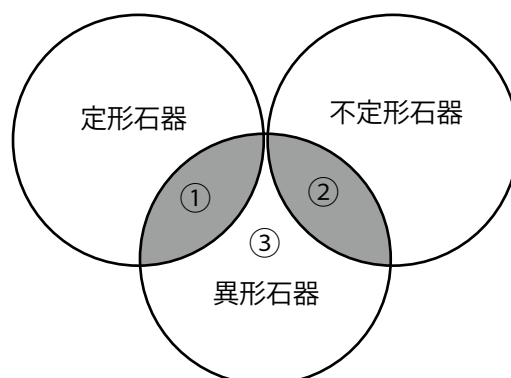


図2 本稿における剥片石器の分類概念図

4 三内丸山遺跡出土の異形石器の再検討

三内丸山遺跡をはじめ、縄文遺跡から多く出土する異形石器とされているものには、ここで「三日月形」と呼称する形態の石器がある^(註2)(図3)。

形態的な特徴は、湾曲した三日月状あるいはV字状を基本として、つまみや角が付けられたり、挟りを有するものである。つまみが付けられるものは、石匙に分類される基準と同様の属性をもっているため、その一種類と考えることもできるが、体部が三日月状を呈する同様なまとまりでとらえられるため、石匙よりもより類型化した一群として設定することが妥当である。これらの石器群を仮にA三日月形、B三日月形（つまみ付き）、C三日月形（角付き）、D三日月形（挟り入り）と呼称する。これらは異形石器とされてきたため、類型化して考察されなかったものである。このように類型化が可能であるということは、三日月形石器が当時の人々に日常的な道具類、いわゆる第一の道具として認識されていた可能性がある。

(1) 三日月形石器の時期的変遷と出土状況

①出土状況

三内丸山遺跡では三日月形石器は、竪穴住居跡、埋設土器、盛土などから出土しているが、他の遺物と同様に盛土からの出土が突出して多い。

91号埋設土器からは、B類が出土している（図

4)。土器は円筒上層 a 式であり、この B 類は副葬品と考えられている。

中期は盛土が大規模に形成され、三日月形石器は盛土を中心に出土するようになる。平面的に発掘調査を行った北盛土における三日月形石器の分布をみると、南西部に集中し、A 類と B 類がある程度のまとまりをみせている（図 5）。層位が不明瞭なものもあるため、推測の域を出ないが、廃棄場所が定められている可能性がある。

② 時期的変遷（図 6）

三内丸山遺跡出土の三日月形石器の中で、出土層位が明確なものや、遺構から出土したもので、詳細な時期が推測できるものを抽出し、時期的な変化の傾向をとらえた。右には前期中葉～末葉と中期のの違いで大まかに分けられる図を作成し、左図と合わせて時期的な傾向をとらえてみた。

前期中葉～末葉には A 三日月形、B 三日月形（つまみ付き）がみられる。中期前葉には B 類、中葉には A 類、B 類、C 三日月形（角付き）、中期後葉には C 類がみられる。前期中葉～末葉には、A 類と B 類がすでに存在し、中期中葉には C 類が遅れて出現することが考えられる。D 類には時期認定できる資料がなかった。

東北地方や北海道では、少なくとも縄文時代前期～後・晩期の遺跡からも三日月形石器は出土するため、この地域特有の普遍的な石器であるとい

える。後期には三日月形に角の数や大きさが過剰に表現されるものがよくみられるようになるため、変容が進み当初の三日月形石器とは用途や意味などが異なる系統に変化した可能性も考えられる。

（2）用途の推測

この三日月形石器の中には、形態から鎌あるいは鉤のような用途を有した可能性が指摘できる。三日月形石器からは除いたが、半月形の異形石器も鎌のように使われた可能性がある。瞥見しただけであるが、海外の資料にはこのような形態の石器を鎌として扱っているものがある。微妙に左右非対称に仕上げられているものがみられるのも鎌や鉤として使うために必要な措置であった可能性も指摘できる。

高橋哲や山田しょうが指摘している、三日月形石器表面にみられる D タイプ光沢（角・骨主体で生じる光沢）や摩滅（高橋 2011）は、角・骨・木などの柄に、この石器を装着して使用を繰り返した際に残された痕跡である可能性もある。また、直接あるいは皮などでくるんだりしたうえで手に持つ部分であったら、そこだけ摩滅することもあり得る。表面に摩滅がみられるものは各地にみられる（高橋 2011）ため、この石器が同様の使われ方をされていた可能性がある。

つまみや角、挟りが施されるのは、柄に対する

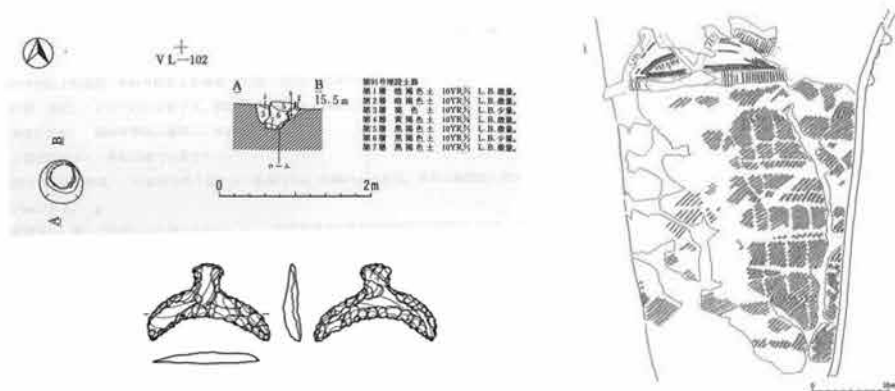
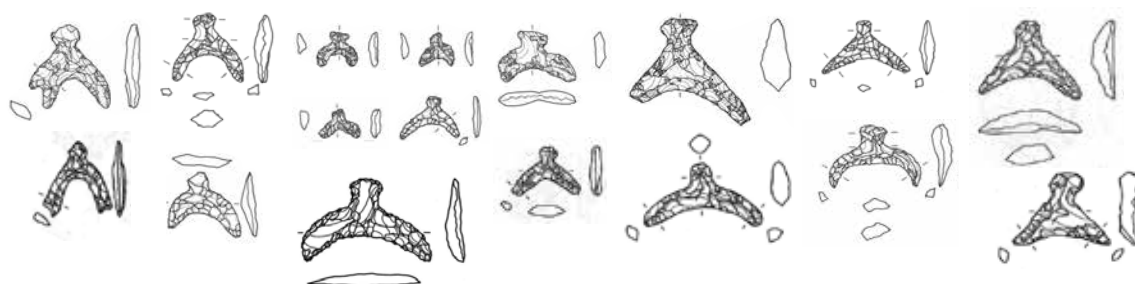


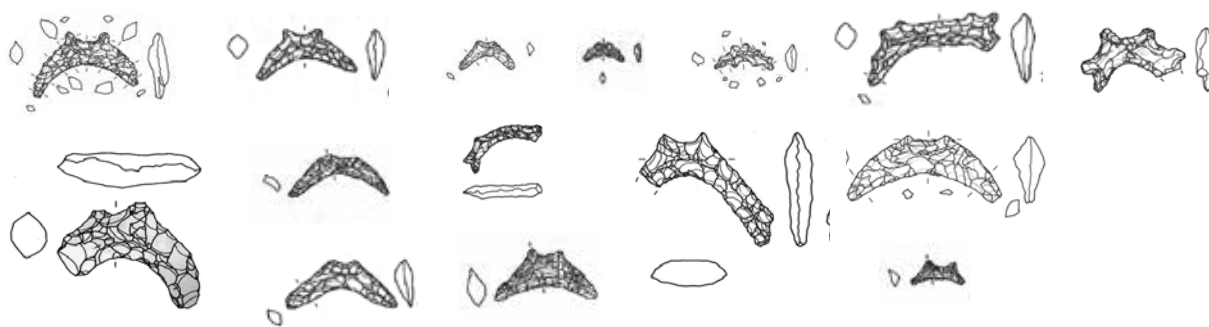
図4 埋設土器から出土した三日月形石器（91号埋設土器）（青教委1993）



A 類



B 類 つまみ付き



C 類 角付き



D 類 挟り入り

図3 三日月形石器（すべて三内丸山遺跡報告書から引用）

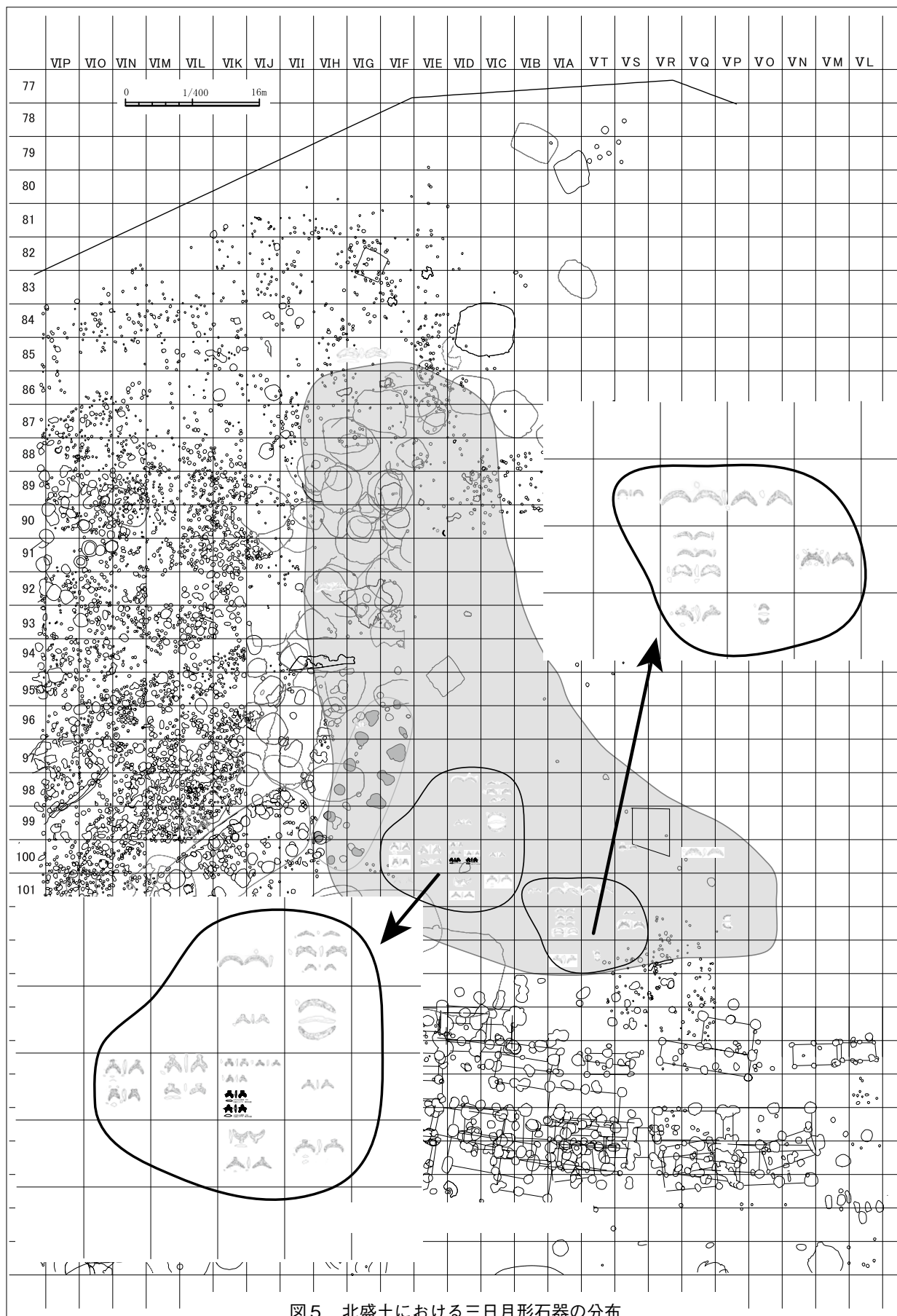


図5 北盛土における三日月形石器の分布

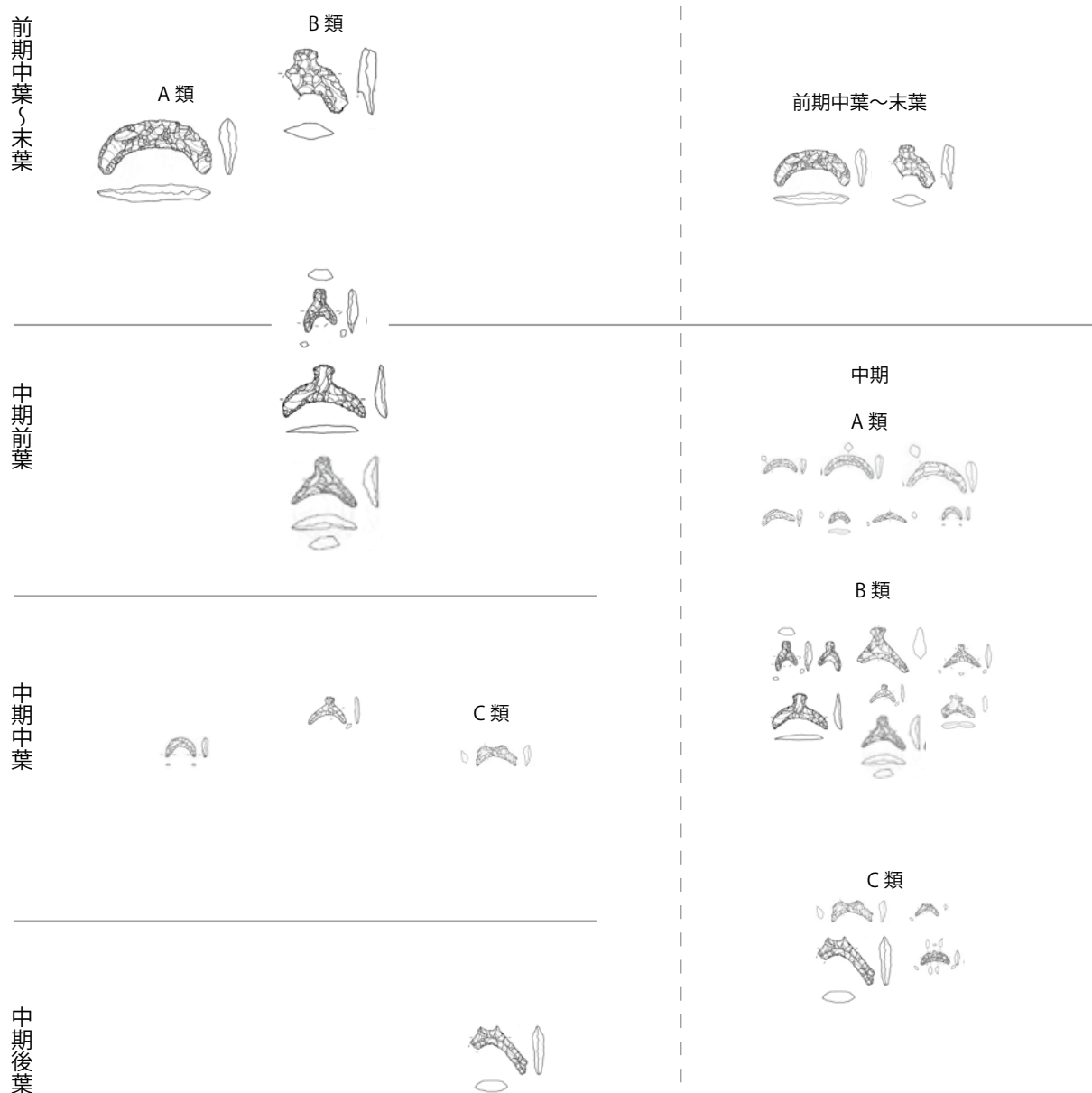


図6 三日月形石器の時期的変遷（すべて三内丸山遺跡報告書から引用）

装着方法の違いや装着強度を高めるためかもしれない。

このように考えると、A・B類が基本形として先に存在し、C類が派生して生まれた可能性も指摘できる。ただし、湾曲部の角度がついたものや極端に小さいもの、角などが極端に様式化したものは、異なった用途を検討する必要がある。刺股のように使われるものや、ミニチュアのような儀器に変化している可能性がある。

しかし、上述の用途の推測は形態や機能部では

ない部分の使用痕の事例から導き出したものにすぎないため、三日月形石器が実際に鎌や鉤として使用可能であるのか、その機能部を用いた実験など、さらなる分析や検討を行っていく必要がある。

5 おわりに

嘴状石器（君島2012）と呼ばれる石製品にも、本稿で三日月形石器としたものと類似のものがみられる。分類基準が異なると別の石器として議論されることがあるが、その基準は有効なものなの

かどうかを問い続けることが必要である。

本稿で「三日月形石器」としたものは、異形石器とされたものの中でも類型化できるため定形石器と同様の整理を行った。それを踏まえた上で解釈に向かう方法が、基本的な考古学的検討であると考えられる。しかし、本稿で行った分類もあくまで形態から類似点をさぐったもので、似ているものを整理したにすぎない。

今後は、観察する属性を増加、変更することによって、さらなる遺物の具体的な理解が可能である。大きさや素材の検討^(註3)や使用痕の観察^(註4)なども、石器の理解のために有効な視点である。上述したように、三日月形石器が、鎌や鉤に用いられたという推測に蓋然性を与えていくためにも、さまざまな属性分析は必要である。

本稿が従来異形石器と一括していたものの分類や用途などを再検討するきっかけとなれば幸いである。

謝辞

青森県教育庁文化財保護課課長の岡田康博氏には、三日月形石器を定形的に考えるというアイデアや、ひいては異形石器に対する全体的な考え方や本稿の構成について、多くのご指導・ご助言をいただきました。

また、三内丸山遺跡保存活用推進室の職員からも多くのご指導・ご助言をいただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

【註】

註1 鈴木氏は、石偶にも定形石器の形態をとりいれたものがあると解釈している。

註2 ここで三日月形石器と呼称する石器を定形石器として考える必要性は、岡田康博氏にご指摘をいただいた。

註3 山形県の押出遺跡や秋田県の上ノ山遺跡では、圧倒的に頁岩製の石器が多い中で、異形石器とされているものは選択的に鉄石英や玉髓を使用して

いる。三内丸山遺跡の第6鉄塔地区のⅥ層で一括出土した異形石器とされているものも玉髓が使用されている。これらの石器を特別なものとしていた可能性があり、今後、詳しく考察を行う必要がある。

註4 江坂輝弥氏は、異形石器は骨角器の製作道具ではないかと推測しており、それを踏まえて高橋哲氏が、三内丸山遺跡出土のB類（つまみ付き）の使用痕分析を行っている。その結果、Dタイプ光沢（角・骨主体で生じる光沢）を確認しているが、刃部に残された痕跡ではないため、実用ではない別の意味があるとしている（高橋2011）。また、三内丸山遺跡の三日月形石器には剝離の稜線上に擦痕の観察されるものが多い（青森県教育委員会2012）。

【文献】

菅原哲文 2009「やまがた前期縄文人のくらし」『じょうもん天地人』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

鈴木克彦 2005「石偶に関する研究－石偶、異形石製品」『北奥の考古学』

久保田健太郎 2012「異形石器研究の一視点」『季刊考古学』第119号 雄山閣

君島武史 2012「嘴状石器」『季刊考古学』第119号 雄山閣

高橋 哲 2011「縄文の使用痕 第21回 異形石器」『アルカ通信』No.98

羽柴雄輔 1886「石鏃中に他の石器を混同せる説」『東京人類学会報告』第13号

青森県教育委員会 1974『近野遺跡発掘調査報告書Ⅲ・三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第33集

青森県教育委員会 2005『近野遺跡Ⅷ』青森県埋蔵文化財調査報告書第394集

青森県教育委員会 1993『三内丸山(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第47集

青森県教育委員会 1995『三内丸山遺跡Ⅴ』青森県埋

蔵文化財調査報告書第204集
 青森県教育委員会 1996『三内丸山遺跡Ⅶ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第229集
 青森県教育委員会 1996『三内丸山遺跡Ⅷ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第230集
 青森県教育委員会 1997『三内丸山遺跡Ⅸ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第249集
 青森県教育委員会 1997『三内丸山遺跡Ⅹ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第250集
 青森県教育委員会 1997『三内丸山遺跡Ⅺ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第251集
 青森県教育委員会1999『三内丸山遺跡ⅩⅤ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第283集
 青森県教育委員会 2000『三内丸山遺跡ⅩⅥ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第288集
 青森県教育委員会 2000『三内丸山遺跡ⅩⅦ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第289集
 青森県教育委員会 2001『三内丸山遺跡ⅩⅩ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第338集
 青森県教育委員会 2003『三内丸山遺跡23』 青森県埋蔵文化財調査報告書第381集
 青森県教育委員会 2003『三内丸山遺跡24』 青森県埋蔵文化財調査報告書第382集
 青森県教育委員会 2006『三内丸山遺跡31』 青森県埋蔵文化財調査報告書第443集
 青森県教育委員会 2007『三内丸山遺跡34』 青森県埋蔵文化財調査報告書第463集
 青森県教育委員会 2008『三内丸山遺跡35』 青森県埋蔵文化財調査報告書第478集
 青森県教育委員会 2011『三内丸山遺跡38』 青森県埋蔵文化財調査報告書第519集
 青森県教育委員会 2011『三内丸山遺跡39』 青森県埋蔵文化財調査報告書第520集
 青森県教育委員会 2012『三内丸山遺跡40』 青森県埋蔵文化財調査報告書第533集
 青森県教育委員会 2013『三内丸山遺跡41』 青森県埋蔵文化財調査報告書第546集
 青森県教育委員会 1992『富ノ沢(2)遺跡Ⅴ』 青森県埋

蔵文化財調査報告書第143集
 青森県教育委員会 1993『富ノ沢(2)遺跡Ⅵ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第147集
 青森県教育委員会 2000『三内丸山(6)遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第279集
 青森県教育委員会 2001『三内丸山(6)遺跡Ⅲ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第307集
 青森県教育委員会 2002『畑内遺跡Ⅷ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第326集
 青森県教育委員会 2002『三内丸山(6)遺跡Ⅳ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第327集
 青森県教育委員会 2004『三内丸山(5)遺跡Ⅱ・近野遺跡Ⅶ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第370集
 青森県教育委員会 2004『笹ノ沢(3)遺跡Ⅳ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第372集
 青森県教育委員会 2006『東道ノ上(3)遺跡』 青森県埋蔵文化財報告書第424集
 青森県教育委員会 2007『西張平遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財報告書第436集
 青森県教育委員会 2010『明戸遺跡・高屋遺跡』 青森県埋蔵文化財報告書第488集
 秋田県教育委員会 1988『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ－上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡』 秋田県文化財調査報告書第166集
 秋田県教育委員会 1997『池内遺跡 遺構編』 秋田県文化財調査報告書第268集
 秋田県教育委員会 1999『池内遺跡 遺物・資料編』 秋田県文化財調査報告書第282集
 (助)岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書－第6次～第8次調査』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第273集
 (助)岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター『力持遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第510集
 一戸町教育委員会 1993『御所野遺跡Ⅰ』
 一戸町教育委員会 2004『御所野遺跡Ⅱ』
 一戸町教育委員会 2006『御所野遺跡Ⅲ』
 南茅部町教育委員会 1996『大船Ⅲ遺跡』

山形県教育委員会 1990『押出遺跡』山形県埋蔵文化
財調査報告書第150集

(財)山形県埋蔵文化財センター 2004『高瀬山遺跡』山
形県埋蔵文化財センター調査報告書第121集

②三内丸山遺跡南盛土の剥片・碎片集中地点の石器について

齋藤 岳（青森県埋蔵文化財調査センター）

1 はじめに

三内丸山遺跡の南盛土には2地点の剥片・碎片集中地点が存在し、その概要は報告済である（青森県教育委員会2009;注1）。報告書では出土遺物の詳細は接合等を進めた後に紹介することとした。接合資料が一定数得られるまでになったため、本稿ではそれらの実測図等を紹介する。

長さ2cm未満の小剥片の接合資料が多数得られ、石器製作時の細部加工を具体的に示す資料として今後の貸出・展示資料となりうる。

また、土ごと取り上げて水洗い選別で1mmまでのふるいにかけたため、石器破片・剥片・碎片（本稿では長さ1cm以上のものを剥片、未満のものを碎片とする）が一括して得られた。うち1地点は検出状況を詳細に記録しており、同じ南盛土からの出土例として、2地点を比較対照し分析を深めることができる。そのため石器製作技術、遺棄か廃棄かの推定、製作目的とした石器の推定、出土石器が一連の行動の流れのなかで発生したものなのか、複数の行動のものが混じっているのか等の様々な仮説をたてて、検証することが可能と考えられる。石器は一括性が高く、さらに接合することは確実である。小剥片や碎片を扱った研究（長井2003・2005ほか）は少ない。資料の魅力と重要性を伝えることを本稿の目的として写真と図で紹介する。

2 資料と調査方法

(1) 資料の概要

資料は南盛土のVII-118グリッド（円筒上層d式期）とVII-113グリッド（縄文時代中期）で得られている（以降、前者を資料1、後者を資料2とする）。資料1の出土状況は、写真1のとおりであり、長径65cm、幅40cm、最大厚3cmの砂の直上にあった。

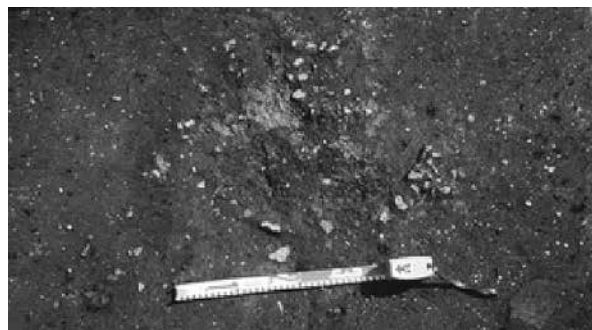


写真1 資料1 出土状況 砂が一部露出

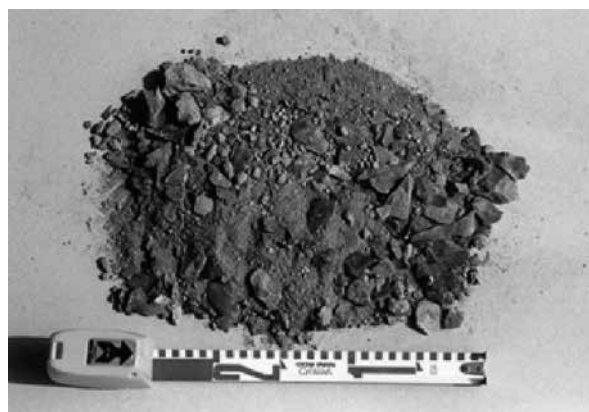


写真2 資料1 水洗い前



写真3 資料2 水洗い前

写真2・3に水洗いの前の状況を示す。資料1は、直下の砂とともに取り上げ、資料2は確認後に土ごと採取した。

資料1の土壌込みの容積は600ccで、重量は1,267gである。資料2の土壌込みの容積は400ccで重量は846gである。いずれも4mm・2mm・1mmのふるいで水洗いし、小碎片まで回収した。

(2) 出土石器の接合・図化・観察

1・2図に資料1・2の代表的なものを図化して示す。出土石器は、いずれも珪質頁岩製で、母岩別に分類したうえで、接合作業を行った。その結果、判別しやすい礫皮を中心としたもの（2図1・31）の他にも石核を中心に接合したものも得ることができた（1図8）。

資料1・2ともに細部加工のある破片資料が含まれていた。また、両面加工の石器製作に伴って生ずる剥離面を打面とし、バルブが発達せず、側面が湾曲する剥片（ポイントフレイク：2図18など）が含まれている。いずれも製作された石器を知る手がかりとなるものである。また、背面が主要剥離面となるもの（2図25など：写真8）は資料2で多い。

3 資料の詳細

(1) 資料1（VL-118グリッド）

資料1の4mm以上のメッシュで取り上げた小剥片等を写真4で示す。色調など石の特徴をもとに大きく3つに大別して撮影した。

写真右下のものは、1図1～7の母岩Aを中心とする明褐色のものであるが、一部に1図31（母岩G）・32（母岩H）のように異母岩と考えられるものを含む。

左下のものは黒褐色で1図8～10の母岩B及びその可能性のあるもの（1図11：礫皮付近で判別困難）である。

写真上方には黒～灰褐色の剥片をまとめた。左側は黒色で光沢があり良質な石材で、1図12～24

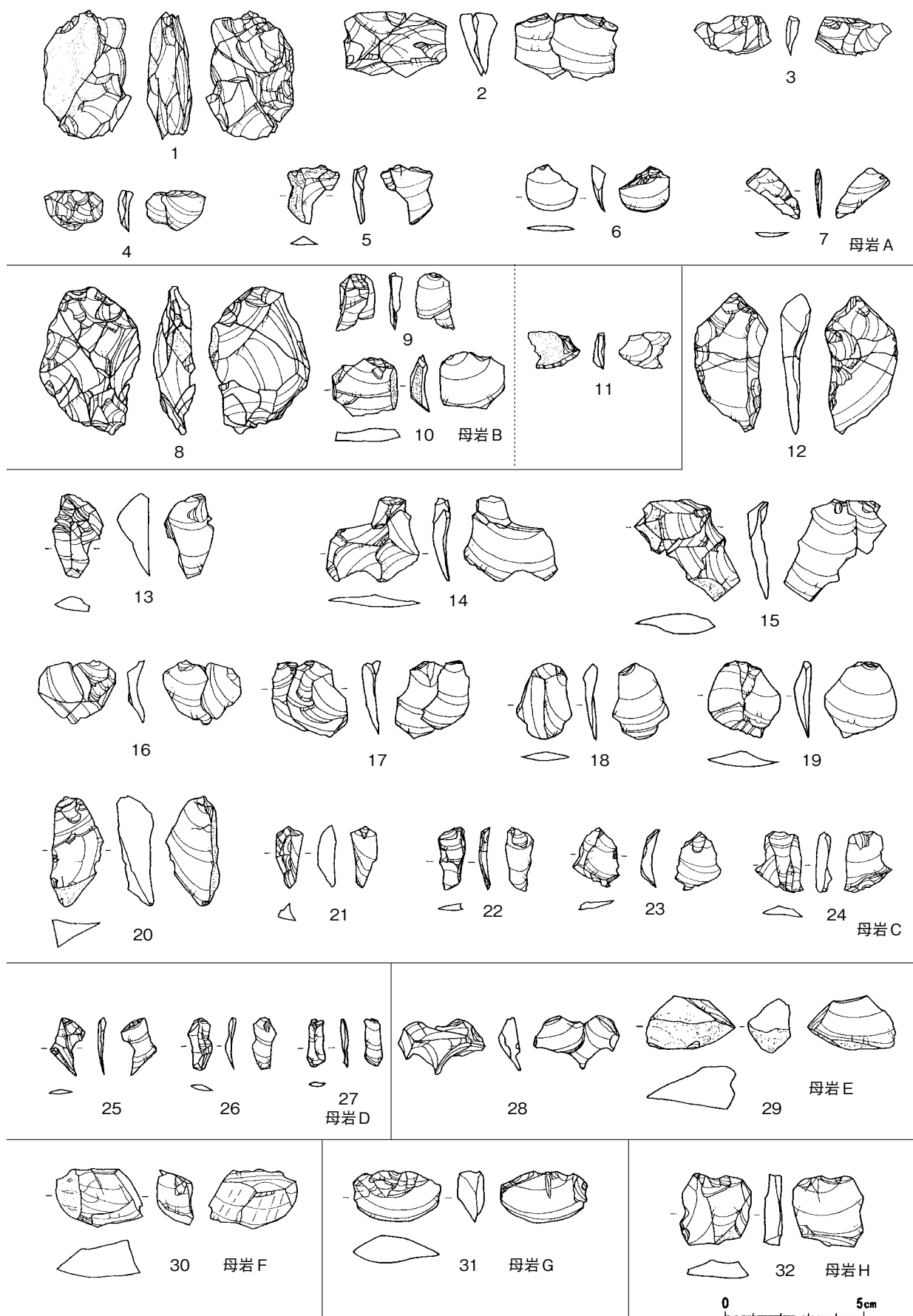
の母岩Cとしたものである。中央から右側は灰褐色で光沢が少ない。1図25～27（母岩D）等のものである。しかし、両者の中間的なものがあり、両者を連続させた。



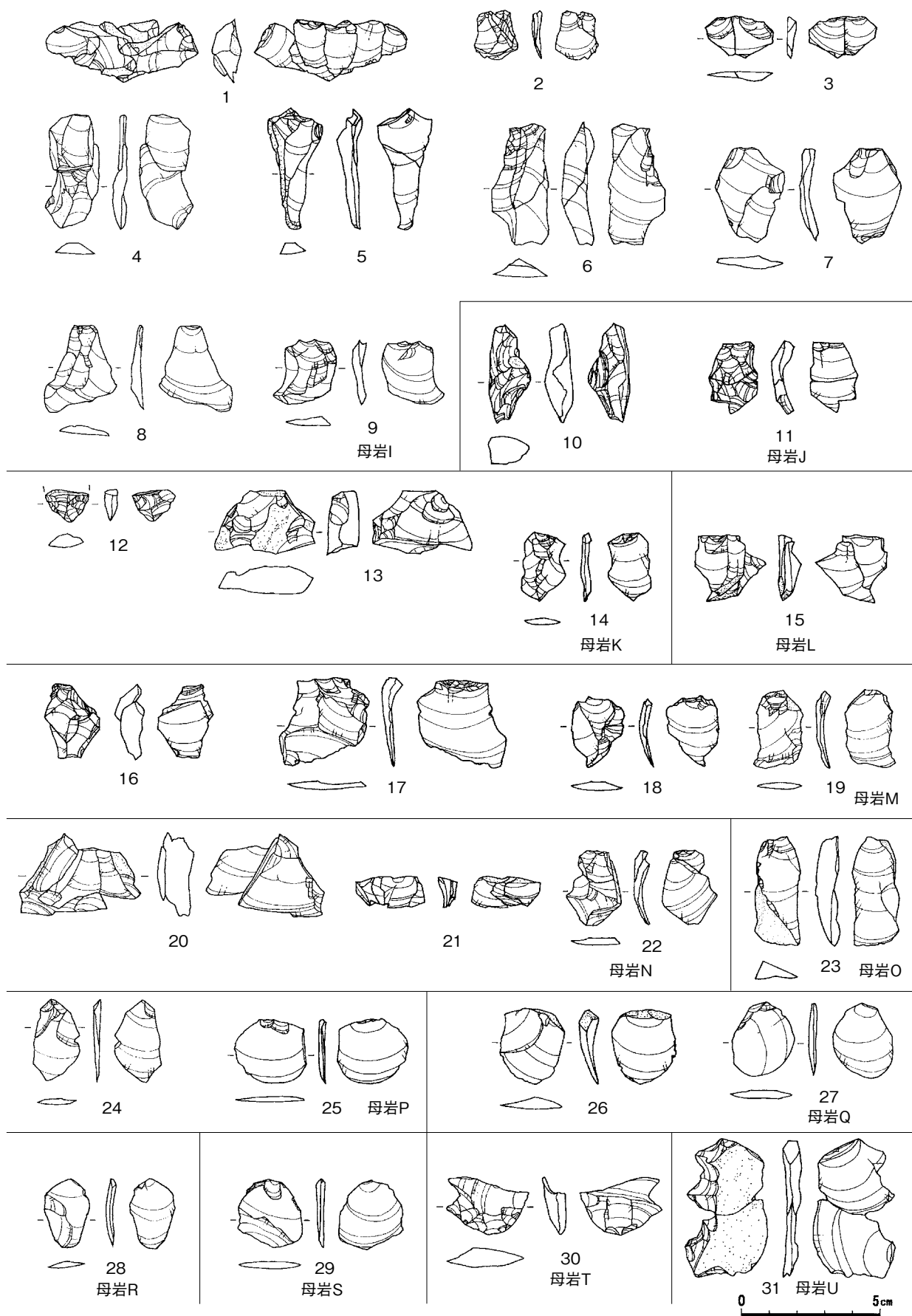
写真4 資料1の剥片

1図1は10点の剥片の接合資料であり、両面加工の石器から剥離された調整剥片が接合したものである。1図2とわずかに接合する部分がある（写真5）。調整剥片が接合する内側に空洞部分がある。空洞部分は石槍あるいは石筥の未製品の可能性がある。1図3・4は打面や側面の湾曲が1図2と共通し、さらに接合する可能性がある。以上から1図1～7の母岩Aは、石槍もしくは石筥の製作に伴う剥片・碎片の可能性がある。

母岩B（写真7）の1図8は、17点が接合した両面加工の石器である。中央の核となる部分に割れが認められ、それによって製作が中断したものと考えられる。大きさと形は1図1と共通性があり、目的としたものは石槍もしくは石筥の可能性がある。また、同一母岩のものは長さや幅が3cm以上の剥片及び礫皮のついた剥片は少なく、両面加工の石器の状態から剥片剥離を開始した可能性がある。



1図 資料1 (VIL-118)



2図 資料2 (VE-113)

図番号	出土地点	母岩	長mm	幅mm	重g	接合点数	備 考
1図1	VIL-118	A	46	31	15.5	10	両面加工石器の調整剥片接合品、2と接合
1図2	VIL-118	A	24	38	5	2	切子打面、側面湾曲、1と接合
1図3	VIL-118	A	14	28	1.1	6	切子打面、碎片・小剥片接合品
1図4	VIL-118	A	14	22	1	2	切子打面、側面湾曲
1図5	VIL-118	A	21	18	0.9	2	0.7mmの碎片との接合品、切子打面、側面湾曲
1図6	VIL-118	A	17	19	0.8		切子打面、背面主要剥離面
1図7	VIL-118	A	18	19	0.3		打面一部欠失、打面線状に近い
1図8	VIL-118	B	54	36	26.9	17	両面加工石器
1図9	VIL-118	B	21	13	0.7	3	切子打面
1図10	VIL-118	B	21	23	2.7		側面湾曲
1図11	VIL-118	B?	13	19	0.8	2	打面付近欠失
1図12	VIL-118	C	50	26	8.7	3	削器?
1図13	VIL-118	C	31	18	4.2		石核縁辺を剥離
1図14	VIL-118	C	31	34	2.9	2	側面湾曲
1図15	VIL-118	C	37	28	4.4	3	打面線状、側面湾曲
1図16	VIL-118	C	22	28	1.9	2	打面90° 近く転移
1図17	VIL-118	C	28	27	2.3	2	切子打面、側面湾曲
1図18	VIL-118	C	28	21	1.2		バルブ発達せず
1図19	VIL-118	C	27	26	3		切子打面
1図20	VIL-118	C	40	19	5.9		石核縁辺を剥離
1図21	VIL-118	C	23	11	0.9		石核縁辺を剥離
1図22	VIL-118	C	23	9	0.5		側面湾曲
1図23	VIL-118	C	22	16	1		打面点状、側面湾曲
1図24	VIL-118	C	22	17	1.2		打面線状、ヒンジフラクチャー
1図25	VIL-118	D	21	13	0.2		切子打面、側面湾曲
1図26	VIL-118	D	19	9	0.2		打面線状、側面湾曲
1図27	VIL-118	D	17	7	0.2		打面線状
1図28	VIL-118	E	19	32	2.4	2	打面90° 転移、側面湾曲
1図29	VIL-118	E	20	32	7.9		厚みある横長剥片
1図30	VIL-118	F	21	31	8.2		厚みある横長剥片
1図31	VIL-118	G	19	31	5.2		厚みある横長剥片、背面主要剥離面
1図32	VIL-118	H	26	26	4		切子打面、二次加工
2図1	VIE-113	I	20	55	4.8	7	打面礫面、側面湾曲
2図2	VIE-113	I	18	16	0.6	3	切子打面
2図3	VIE-113	I	15	25	0.8	2	左側に礫面
2図4	VIE-113	I	41	19	2.5	2	180° 打面転移
2図5	VIE-113	I	44	20	3	2	バルブ大
2図6	VIE-113	I	44	20	4.6	2	側面湾曲
2図7	VIE-113	I	34	25	3.1		側面湾曲
2図8	VIE-113	I	31	26	1.5		打面小、側面湾曲
2図9	VIE-113	I	23	18	1.7		側面湾曲
2図10	VIE-113	J	36	15	4.1		両面加工の石器の節理面で割れた破片
2図11	VIE-113	J	26	18	2.5	2	側面湾曲
2図12	VIE-113	K	11	16	0.7		石鏃未製品の基部? 裏面左側に平坦剥離
2図13	VIE-113	K	23	36	10.2		両面加工の石器の節理面で割れた破片
2図14	VIE-113	K	25	15	0.8		切子打面、側面湾曲
2図15	VIE-113	L	24	25	2.2	2	右側打面欠失、バルブ不明瞭
2図16	VIE-113	M	27	18	3.4	2	2点とも打面付近欠失
2図17	VIE-113	M	33	32	2.5		切子打面、側面湾曲
2図18	VIE-113	M	26	19	1.3		切子打面、側面湾曲
2図19	VIE-113	M	28	17	1.2		切子打面、側面湾曲
2図20	VIE-113	N	29	42	8.5	2	右は上部欠失、左は節理で割れ、厚い
2図21	VIE-113	N	11	25	1.3	3	打面・礫面?
2図22	VIE-113	N	27	20	1.8	2	側面湾曲
2図23	VIE-113	O	40	16	3.2		打面礫面
2図24	VIE-113	P	29	16	0.8		打面礫面で点状に近い、側面湾曲、背面主要剥離面
2図25	VIE-113	P	23	25	1.2		背面主要剥離面
2図26	VIE-113	Q	27	23	2.4		背面主要剥離面
2図27	VIE-113	Q	27	23	1.6		背面主要剥離面
2図28	VIE-113	R	25	17	0.8		背面主要剥離面
2図29	VIE-113	S	25	24	1.2		背面主要剥離面
2図30	VIE-113	T	21	30	3		両面加工の石器の節理面で割れた破片
2図31	VIE-113	U	50	30	6.3	2	180° 近い打面転移、背面礫面

1 表 観察表

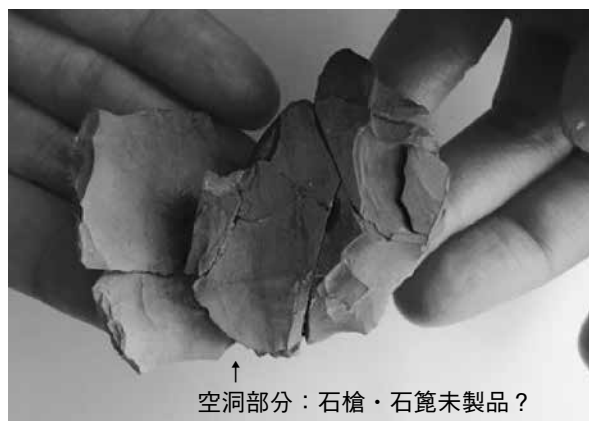


写真5 資料1 1図1+2



写真6 母岩Aの1図1～5・7（調整剥片）



写真7 母岩B 1図8～10



写真8 2図25～27（左：正面 右：裏面）

1 図12～24の母岩Cとしたものは石器素材となる剥片に細部加工が施された1 図12を除くとポイントフレイクを主体とした調整剥片である。それらに対応する両面加工の石器は出土していない。1 図12の素材は横長剥片であり、石核縁辺からの求心的な剥離による剥片の可能性と、両面加工の石器製作の初期段階の剥片の可能性がある。

その他の母岩をみてもポイントフレイクが多く、石槍・石鏃を目的とした両面加工石器の製作に伴うものが多いと考えられる。

(2) 資料2 (VIE-113グリッド)

2 図1～9は母岩Iとしたものであり、2 図1は7点の小剥片の接合資料である。類似した色調を持つ石器とともに写真9で示す。

異母岩の可能性のあるものがあり楕円で示した(上の楕円は2 図23の母岩O、中央右の楕円は図なし)が区分が難しい。ふるいで水洗いしており、左下から4 mm、2 mm、2 mm (色調の明るいもの)、1 mmメッシュのものである。



写真9 母岩I 楕円内は異母岩?

2 図1 裏面



写真10 母岩K・M・P関係品の一部; 下4 mm
・右上2 mm・左上1 mmメッシュ



写真11 同上; 右上2 mmメッシュ拡大



写真12 同上; 左上1 mmメッシュ拡大

母岩K・M・Pに関係する灰色から灰オリーブ色のものを写真10～12に示す。2 mm以下では、ルーペによる観察も可能であるが母岩識別等に時間を要するうえ一個の原石でも部分により色調その他の変異があるため分類は難しい。

資料2では、2 図16～19 (母岩M) のように、

ポイントフレイクなど、両面加工の石器製作に関する資料が多い。資料1と異なる点は礫皮を持つものがより多いこと、縦長剥片が一定量含まれることである。そして、2図12は、石鏃未製品の基部の可能性がある。2図24～27（写真8）など背面が主要剥離面となる剥片は、断面がレンズ形となるため、石鏃の完成形を、よりイメージしやすい素材といえる。

4 まとめ

南盛土の2地点の剥片・碎片集中地点のうち資料1は、複数ある母岩のいずれもが石槍・石筥製作途上の可能性のある両面加工石器の調整剥片が主体となっている。完成品製作に向かう段階の資料としてまとまりを持ち、直下に砂を伴う。廃棄だけではなく、遺棄の可能性もある。なお、両面加工石器から剥離されるポイントフレイクが石鏃素材になる例が知られているが（大場2007）、資料1では側面が湾曲したものが多く、石鏃素材として不向きな剥片が多い。資料1に石鏃の製作関係資料が含まれているかについては母岩ごとに押圧剥離による碎片の有無と出現率を調べることにより検証できると考えられる。

そして資料2もポイントフレイクが多く両面加工石器の調整剥片が主体と考えられる。一方で礫皮を持つ剥片がより多いことから、石核段階から剥離されている可能性がある。また石鏃未製品の可能性のあるものがあり、石鏃製作関係資料が含まれていると予想される。石器製作行動のなかの複数の作業に伴うものと考えられる点が資料1と異なる。廃棄された可能性がある。

また、1mmメッシュのふるいで得られた長さ2mm前後の微小碎片は、図示した石器の製作に伴うものと考えられるが、縦長剥片や調整剥片の剥離過程でも、生じうるものである。搬出されて残らなかったものや初期の製作段階のもの

に関するものも含まれていると考えられる。

今後、微小碎片をも含めた資料全体について、仮説を立てて製作実験をし、出土品と対比し検証する作業により、さらに多くの情報が抽出できると考えられる。

謝辞 本稿を作成するにあたり、青森県教育庁文化財保護課のご協力と、郡山女子大学の會田容弘先生、山形県埋蔵文化財センター大場正善氏のご教示を賜りました。感謝いたします。

（注1）ほかにも遺跡南地区で平成6年度に調査したサッカー場建設予定地区のA区10トレンチ第3号住居跡（円筒上層e式）の覆土から多量の剥片・碎片が出土している。石皿・台石が2点床面に埋め込まれた形で出土しており、石器製作の場として報告されている（青森県教育委員会1995）。

【引用・参考文献】

- 青森県教育委員会 1995『三内丸山(2)遺跡Ⅳ』
青森県教育委員会 2009『三内丸山遺跡35』
大場正善 2007「日向洞窟遺跡西地区出土の頁岩製槍先形尖頭器における技術学的検討－東北地方における隆起線文土器段階の頁岩製槍先形尖頭器製作の身ぶりからみえるもの－」
『古代文化』第58巻Ⅳ号 37～60
大場正善 2012「SX241 出土石器資料」『高瀬山遺跡(HO) 3期発掘調査報告書』70～75
財団法人山形県埋蔵文化財センター
長井謙治 2003「直接打撃と押圧剥離－石器製作における微細剥片の解釈－」
『立命館大学考古学論集 Ⅲ－1』295～313
長井謙治 2005「長野県宮崎遺跡石器集中部の概要」『立命館大学考古学論集Ⅳ』15～28